

1 令和 7 年度 全学 FD 活動概要

1-1 本学 FD 活動の概要

本学では平成 20 年度、「金沢大学 FD 委員会規程」（後掲：4 資料編）に基づき，教育企画会議に全学の FD 委員会を設置した。

FD（ファカルティ・ディベロップメント）とは、

授業の内容・方法の改善等による教育の質の向上並びに学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等の学生支援を図るための教員及び部局等の研究，研修等の自発的取り組みをいう。（金沢大学における FD 活動指針第 2）

FD 委員会は，平成 20 年度に「金沢大学における FD 活動指針」（後掲：4 資料編）をまとめた。同指針は FD 活動が継続的かつ実質的に改善するために，FD 活動をいわゆる PDCA サイクルの中に位置づけている（図 1）。その一環として FD 委員会は各部局等が毎年度作成する報告書に基づき，当該年度の全学における FD 活動に関する報告書（「年度報告書」）を作成することとした。この規定に基づいて作成したものが本報告書である。

本報告書では，各部局等が令和 7 年度の活動に対して行った自己評価のみならず，令和 8 年度における改善に向けての取り組み予定についてもまとめている。これらの点について他部局等の状況を相互に確認し，FD 活動を相互に促進しあうことで，本学全体の FD 活動が継続的かつ実質的に改善することが期待できる。

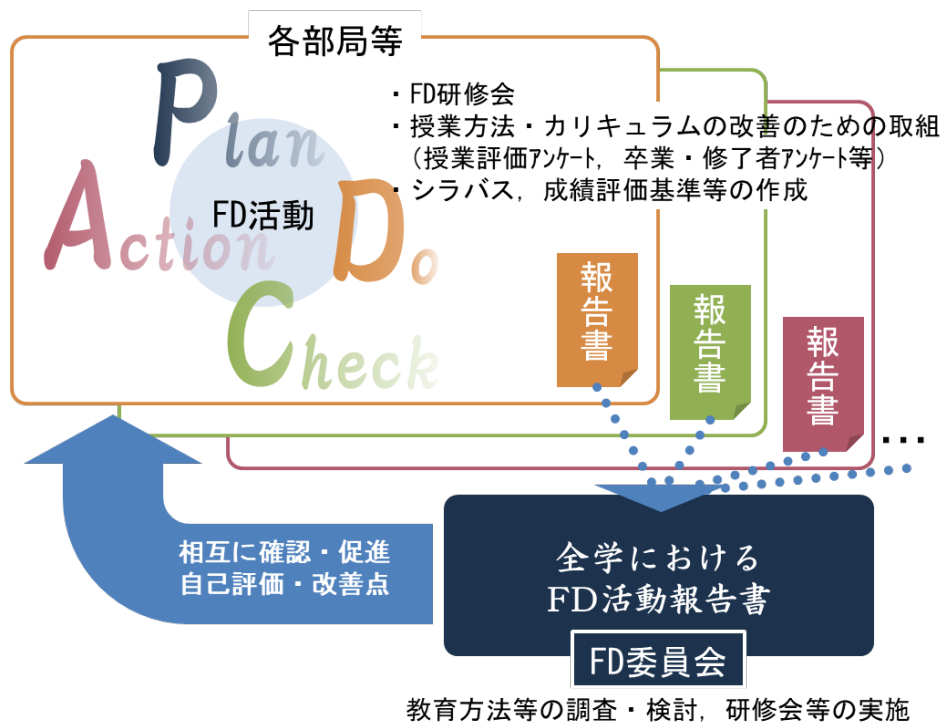


図 1 金沢大学における FD 活動

なお、同指針の特徴の1つとして、授業の内容や方法の改善に関することにとどまらず、学生の心身の保護とキャリア形成を促進する等、学生支援に関する活動をもFD活動の中を含めている点が挙げられる。この点に関連して、本学では教育企画会議学生生活委員会を中心に「学生支援・学修支援」に資する目的で『教職員必携 学生サポートガイドブック』を毎年度、見直しを行い、アカンサスポータルに掲載している（図2）。その内容は学生相談、留学生支援、キャリア支援、障がい学生支援等、多岐にわたっており、教職員は本冊子を有効に活用することにより、学生が抱えた問題を早期に解決し、すべての学生が「充実した学生生活」が送れるように、学生支援に努めている。

また、教員のFD活動支援や学生支援の分野で、職員の果たすべき役割はより一層大きくなりつつある。こうした現状に鑑み、職員のSD（スタッフ・ディベロップメント）及びBSD（バックアップ・スタッフ・ディベロップメント）活動についての指針を盛り込んでいることも同指針の特徴の1つである。

ところで、同指針では、教学マネジメントセンターがFD及びBSD活動に対して必要な支援を行うことを定めている（「金沢大学におけるFD活動指針」第8）。教学マネジメントセンターが令和7年度に行ったFD・BSD活動及び他部局等のFD・BSD活動に対して行った支援の内容については「1-5 教学マネジメントセンターの活動」において述べる。

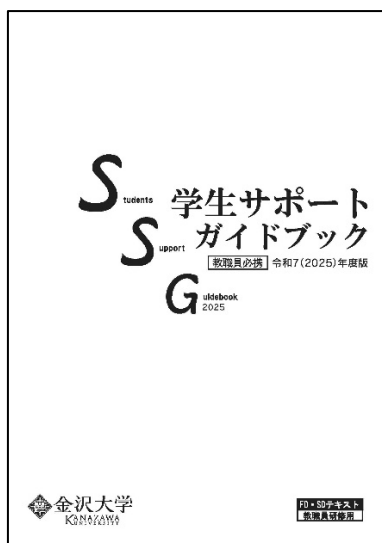


図2 教職員必携 学生サポートガイドブック

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

本学は、学則第3条において、「教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価（以下「自己点検評価」という。）並びに授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を行う」と定めている。また、「金沢大学におけるFD活動指針」（以下、FD活動指針）においては、研修及び研究につけ加えて、「改善に向けての取組みを、計画・実践・評価・改善のサイクルの中に位置づけ、より組織的かつ継続的に行うことにより、実質的な改善へと繋げていく」としている。この指針を受けて、全学および各部局は、これら学則、「FD活動指針」等に基づきFD活動を推進している。

計画・実践・評価・改善のサイクルとは、学類、専攻ごとに、①学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を定め、卒業・修了時における到達目標を明確にする、②ディプロマ・ポリシーに沿ってカリキュラムを体系化し、各授業科目の役割をマップ及びツリーという形で可視化する、③各授業科目のカリキュラム上の位置付け、教育内容・方法・到達基準をシラバスで学生に伝達する、④授業科目および教育プログラムの達成状況を、成績分布・授業評価アンケート・学修ポートフォリオ・卒業・修了者アンケートで確認する、⑤それらの分析結果に基づいて、各授業科目の教育内容・方法の改善、教育プログラムの改善を行い、部局におけるカリキュラム（マップ及びツリー）を再検証するというものである。

令和5年度から、FD活動報告書の効率的かつ効果的に構成する観点に立ち、各部局への照会事項を厳選した。併せて、各部局等のFD活動の掲載について、照会事項単位での掲載を改め、各部局単位での「FD活動計画」→「諸活動チェック」→「自己評価」という改善向上サイクルを重視する観点から部局単位での掲載とした。令和6年度においても、様式の体裁の一部改善を図った。

さらに、令和7年度からは、各部局向けの記入様式1において、「3つのポリシーの運用状況」という照会事項を新たに加え、「①3つのポリシーの記載内容の確認」「②DP (Diploma Policy) に掲げた学修目標の達成度の把握の状況」を毎年度確認することとした。このことにより、3つのポリシーに関するモニタリングを行うことができるように措置した。

各部局のFD活動を事実に基づき確認するため、「令和5年度FD活動報告書」に記載した当該年度の自己評価・総評及び令和6年度に向けた改善計画に沿いながら、「照会事項1 シラバス改善のための取組みの実施状況」、「照会事項2 授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況」、「照会事項3 成績評価基準等の作成・検証状況」、「照会事項4 FD研修会の実施状況(本学主催)」、「照会事項5 令和6年度FD活動の自己点検及び総評」の5項目について照会した。以下に、それらについての回答を点検した結果について述べる。なお、項目によって回答母数が異なる場合もある。

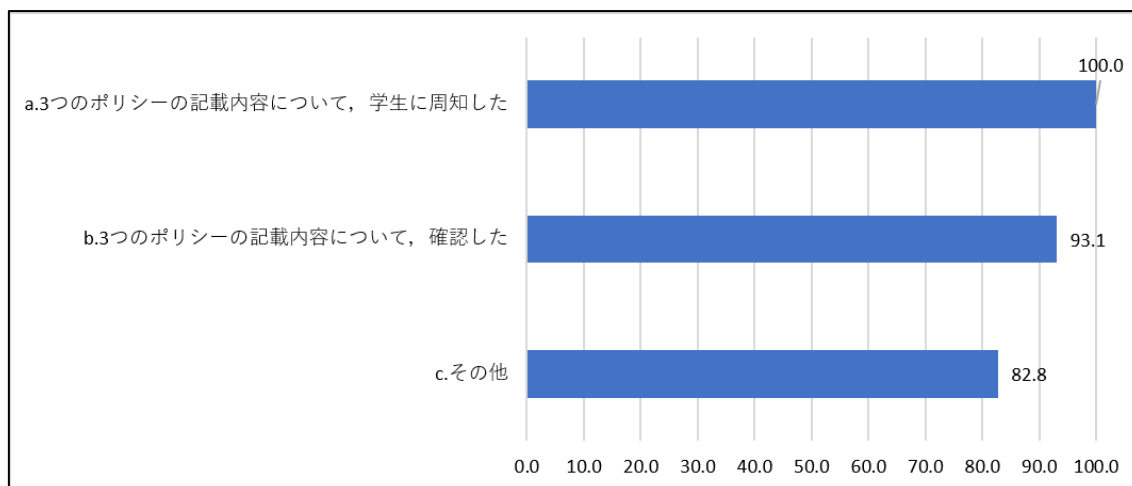
照会事項1 3つのポリシーの運用状況

【検証事項1】令和7年度の実施状況

1) 3つのポリシーの記載内容の確認

3つのポリシーの運用状況については、令和7年度FD活動報告書から新たに加えた照会事項であり、「3つのポリシーの記載内容の確認」と「DP（Diploma Policy）に掲げた学修目標の達成度の把握」の2つに分けた設問を設定している。3つのポリシーの記載内容の確認としては、「3つのポリシーの記載内容について、学生に周知した」、「3つのポリシーの記載内容について、確認した」、「その他」のチェック欄を設けた上で、その具体的な内容について記述する形としている。

各項目のチェック率は図表1-2-1のとおりであるが、「3つのポリシーの記載内容について、学生に周知した」については、学生向け履修案内やホームページ等で周知を行っていることから、全部局がチェックした。また、「3つのポリシーの記載内容について、確認した」については、8割を超える部局が記載内容の確認を行っている。



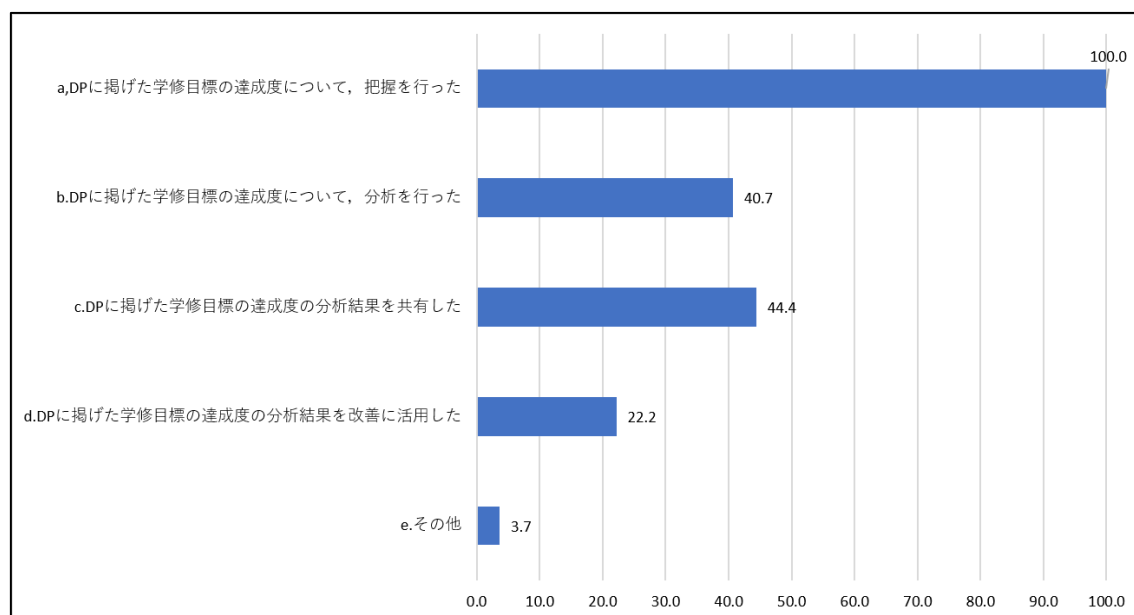
図表 1-2-1 各項目のチェック率（回答母数：26，単位：％）

2) DP（Diploma Policy）に掲げた学修目標の達成度の把握

DP（Diploma Policy）に掲げた学修目標の達成度の把握については、「DPに掲げた学修目標の達成度について、把握を行った」、「DPに掲げた学修目標の達成度について、分析を行った」、「DPに掲げた学修目標の達成度の分析結果を共有した」、「DPに掲げた学修目標の達成度の分析結果を改善に活用した」、「その他」のチェック項目を設けた上で、その具体的な内容について記述する形としている。

各項目のチェック率は図表1-2-2のとおりですが、「DPに掲げた学修目標の達成度について、把握を行った」については全部局がチェックしているが、DPに掲げた学修目標の達成度に関する分析や分析結果の共有は4割程度に留まっている。さらには、分析結果を改善に活用した割合は2割程度である。DPに掲げた学修目標の達成度の把握に留まらず、各部局の教育改善に活かすことに努める必要がある。

1-2 各部署等からの回答をもとにした点検



図表 1-2-2 各項目のチェック率（回答母数：26，単位：％）

照会事項2 シラバス改善のための取組みの実施状況

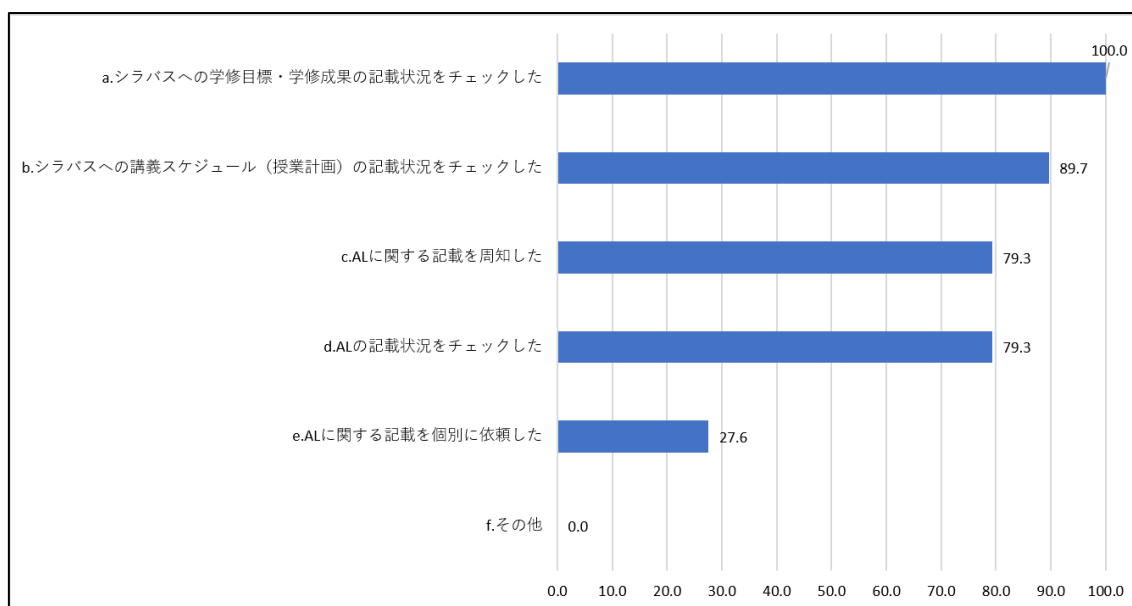
【検証事項1】令和7年度の実施状況

1) シラバスの基本的項目の点検

シラバスの点検については、基本的項目と英語化関連項目の2つに分けた設問を設定した。基本的項目としては、「シラバスへの学修目標・学修成果の記載状況をチェックした」、「シラバスへの講義スケジュール（授業計画）の記載状況をチェックした」、「AL（アクティブ・ラーニング）に関する記載を周知した」、「ALの記載状況をチェックした」、「ALに関する記載を個別に依頼した」、「その他」のチェック欄を設けた上で、その具体的な内容について記述する形としている。

各項目のチェック率は図表 1-2-3 のとおりであるが、シラバス作成における基本項目である「シラバスへの学修目標・学修成果の記載状況をチェックした」については、前年度同様、全部局がチェックした。また、「シラバスへの講義スケジュール（授業計画）の記載状況をチェックした」については、国際学類、医薬保健学総合研究科、先進予防医学研究科がチェックしていない。シラバスのチェック体制は改善されつつあるが、引き続き、改善に努める必要がある。

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

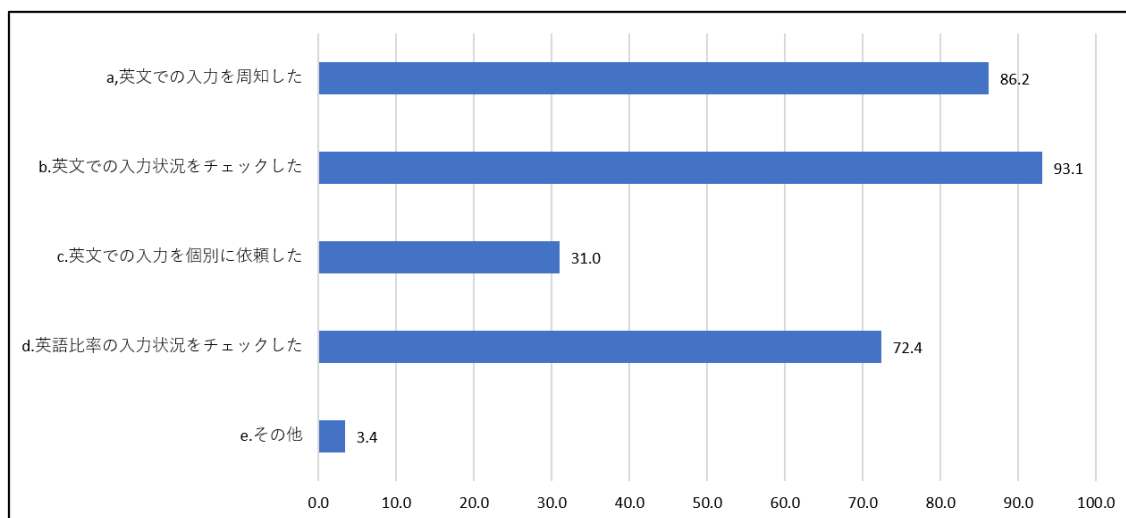


図表 1-2-3 各項目のチェック率（回答母数：29, 単位：％）

2) 授業科目の英語化の点検

次に、英語化関連の設問として、「英文での入力を周知した」、「英文での入力状況をチェックした」、「英文での入力を個別に依頼した」、「英語化率の入力状況をチェックした」、「その他」についてのチェック欄および具体的内容について回答する形としている。

各項目のチェック率は図表 1-2-4 のとおりであるが、「英文での入力を周知した」については物質化学類・物質化学専攻、地球社会基盤学類・地球社会基盤学専攻、医薬保健学総合研究科、先進予防医学研究科、「英文での入力状況をチェックした」については国際学類、国際基幹教育院（GS 教育部門）がチェックしておらず、引き続き、改善に努める必要がある。



図表 1-2-4 各項目のチェック率（回答母数：29, 単位：％）

通常のシラバス点検および授業英語化シラバス点検については、毎年度の定期的な作業として定着する傾向にあるが、各種ヒアリング調査等を通して明らかとなる実態は、入力されているかどうかのチェックに留まっていて、シラバスの記載内容に踏み込んだチェックについては、依然として改善の余地が感じられる。また、多くの学類でシラバス点検について、学類会議、教務・学生委員会などを中心に組織的に確認している一方で、個人レベルでの点検実施や、誰がどこで点検したのかが明記されていないケースがいくつか見られたことは今後の課題であると考える。

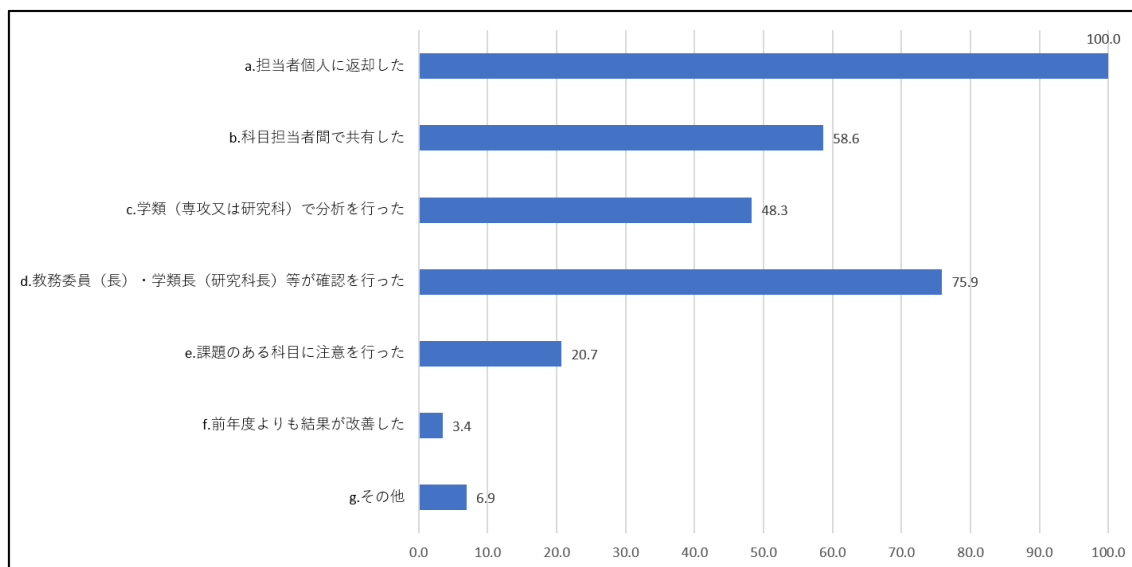
照会事項3 授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況

【検証事項1】授業評価アンケート及び卒業・修了者に対するアンケートの結果を、授業方法・カリキュラムの改善のために、どのように活用したか。

1) 授業評価アンケート

授業評価アンケートの結果をどのように授業改善に活用したかでは、「担当者個人に返却した」、「科目担当者間で共有した」、「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」、「教務委員（長）・学類長（研究科長）等が確認を行った」、「課題のある科目に注意を行った」、「前年度よりも結果が改善した」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-5 のとおりであるが、「担当者個人に返却した」が 100% となっているほか、多くの部局において「教務委員（長）、学類長（研究科長）等が確認を行った」にチェックが入っている。今後、さらに、授業評価アンケート結果の利活用を促していく必要がある。



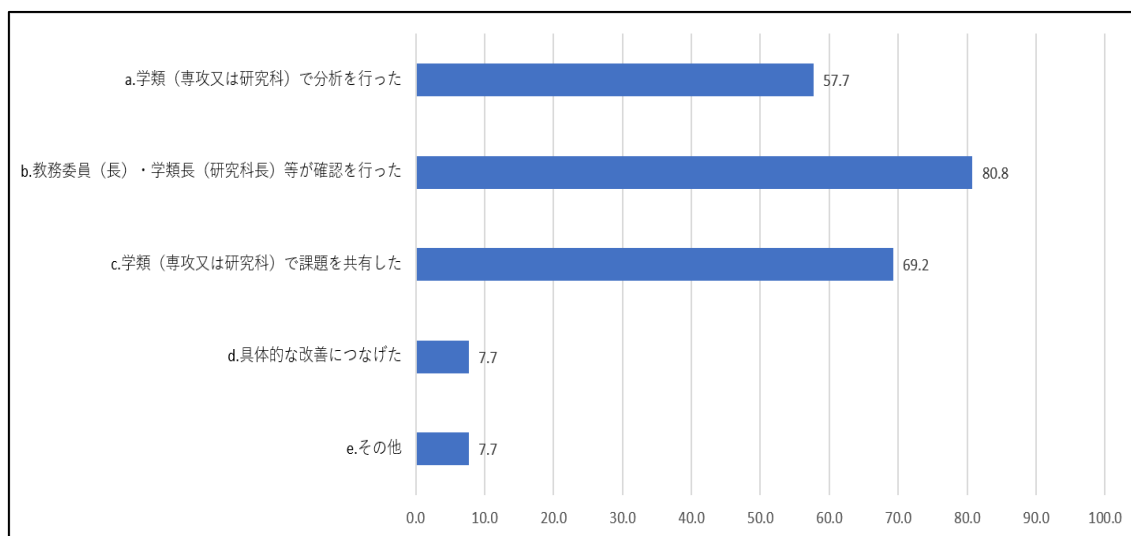
図表 1-2-5 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：%）

「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」で半数前後、「課題のある科目に注意を行った」、「前年度よりも結果が改善した」においては、少数の教育担当部局でしか実施されておらず、さらなる改善を行う必要がある。

2) 卒業・修了者に対するアンケート

卒業・修了者に対するアンケートに関しては、「学類（専攻又は研究科）で分析を行った」、「教務委員（長）・学類長（研究科長）等が確認を行った」、「学類（専攻又は研究科）で課題を共有した」、「具体的な改善につなげた」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-6 のとおりであるが、保健学類、教育実践研究科ですべての項目にチェックが入っているほか、多くの部局において「教務委員（長）、学類長（研究科長）等が確認を行った」「学類（専攻又は研究科）で課題を共有した」にチェックが入っている。全般的に、前年度と同様に、卒業・修了者アンケート結果の利活用が促進されている。



図表 1-2-6 各項目のチェック率（回答母数：26，単位：%）

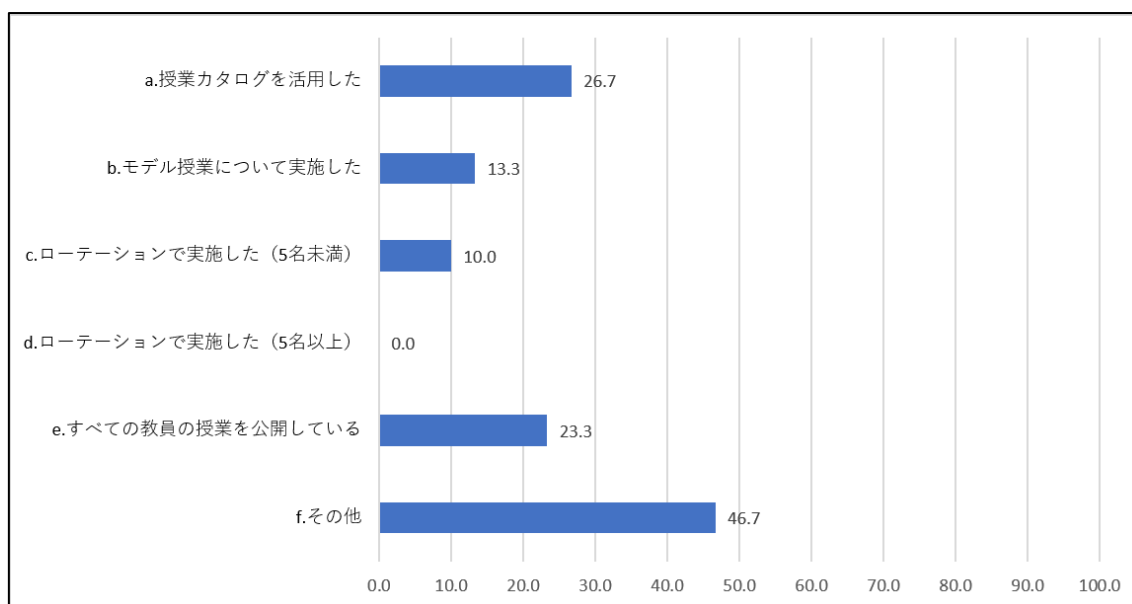
卒業・修了者に対するアンケート結果の確認、共有は一定程度行われているが、具体的な分析や改善につなげるということについて課題を残している。

【検証事項2】教員相互の授業参観（遠隔授業の参観を含む）

遠隔授業の参観を含む教員相互の授業参観に関しては、「授業カタログを活用した」、「モデル授業について実施した」、「ローテーションで実施した（5名未満）」、「ローテーションで実施した（5名以上）」、「すべての教員の授業を公開している」、「その他」について回答を求めた。

「授業カタログを活用した」「モデル授業について実施した」「すべての教員の授業を公開している」について、一定程度の取組が見られるが、授業参観という形態でのFDには改善が必要である。一方で、ほかの設問への回答とは大きく異なり、4割の教育担当部局が「その他」にチェックをつけ、各部局特有の工夫を施した多様な取組について回答している。

1-2 各部局等からの回答をもとにした点検



図表 1-2-7 各項目のチェック率（回答母数：30，単位：％）

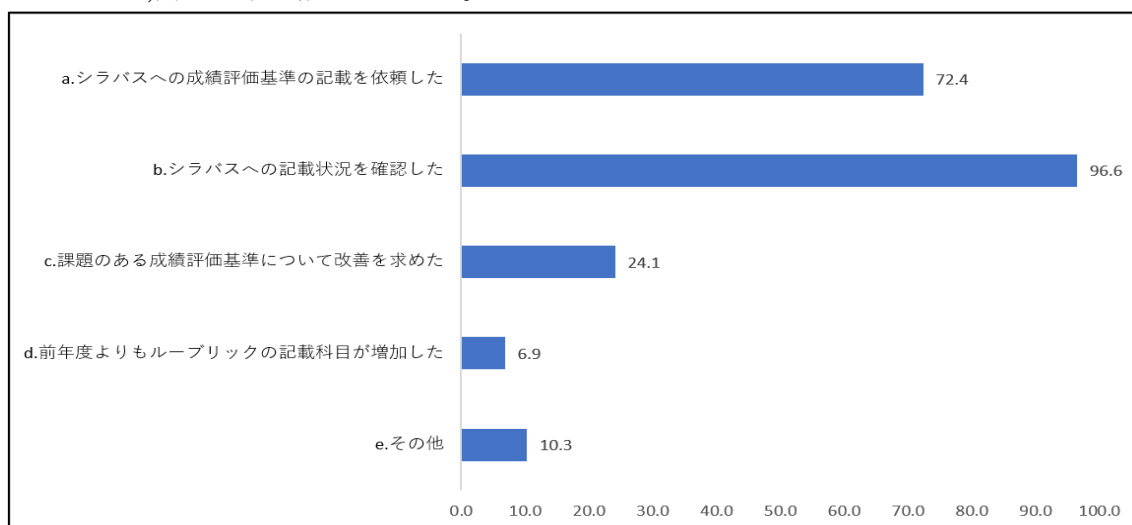
照会事項 4 成績評価基準等の作成・検証状況

【検証事項 1】令和 7 年度の実施状況

1) 成績評価基準等の作成・検証

成績評価基準等の作成・検証では、「シラバスへの成績評価基準の記載を依頼した」、「シラバスへの記載状況を確認した」、「課題のある成績評価基準について改善を求めた」、「前年度よりもルーブリックの記載科目が増加した」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-8 のとおりであるが、薬学類・創薬科学専攻・薬学専攻、国際日本研究教育センターでは、全ての項目にチェックがつけられており、成績評価基準に対する積極的な取り組みがうかがえる。前年度同様に、「シラバスへの記載状況を確認した」については、高い水準を維持している。



図表 1-2-8 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）

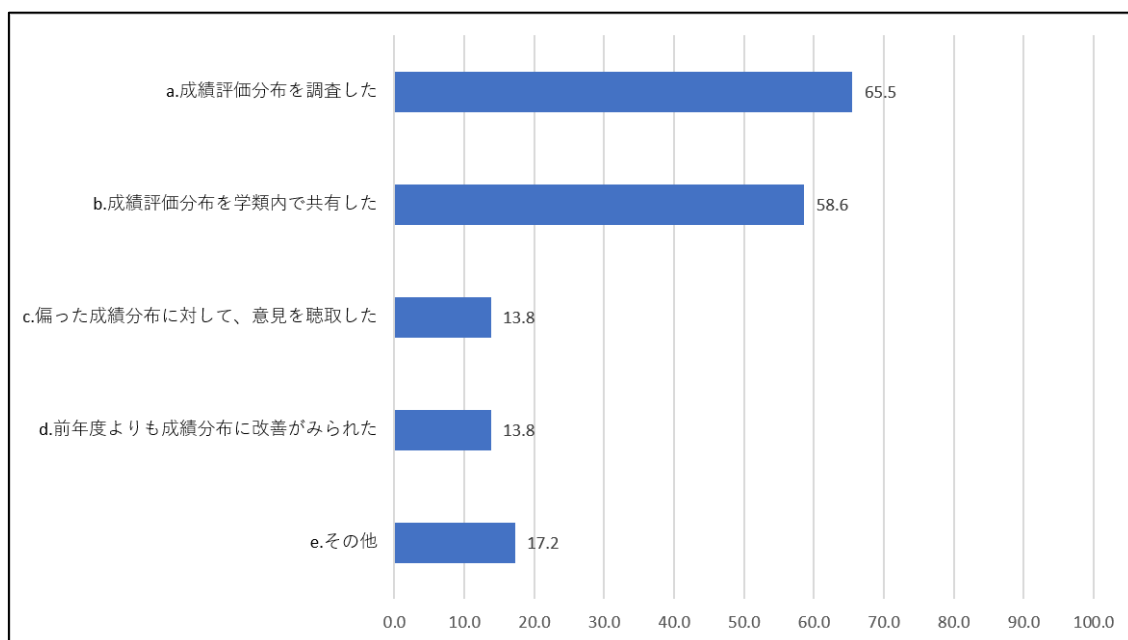
1-2 各部局等からの回答をもとにした点検

「課題のある成績評価基準について改善を求めた」、「前年度よりもルーブリックの記載科目が増加した」の数値が低い。ルーブリックについては科目特性の問題、既に多くの科目で記載されている可能性があるためある程度は仕方ないといえるが、課題のある成績評価基準については恒常的なシラバス点検体制の中で可及的速やかに改善されることが望ましく、FDとして課題である。

2) 成績評価方法の検証

成績評価方法の検証に関しては、「成績評価分布を調査した」、「成績評価分布を学類内で共有した」、「偏った成績分布に対して、意見を聴取した」、「前年度よりも成績分布に改善がみられた」、「その他」について回答を求めた。

各項目のチェック率は図表 1-2-9 のとおりであるが、機械工学類・機械科学専攻、法学研究科（修士課程・専門職学位課程）では、全ての項目にチェックが入っており、成績分布への関心が高いことがうかがえる。一方、1つしかチェックのない教育担当部局も少数ではあるが存在していることは課題である。成績をつけるのは教員の専権事項ではあるが、あまりに偏りのある成績分布は好ましくないという成績分布に関する認識共有を進める必要性が認められる。



図表 1-2-9 各項目のチェック率（回答母数：29，単位：％）

「成績評価分布を調査した」「成績評価分布を学類内で共有した」が高い数値を示しており情報共有は浸透していることがわかる。しかし、「偏った成績分布に対して、意見を聴取した」は1割程度、「前年度よりも成績分布に改善がみられた」は2割満たない程度と低い数値となっており、成績分布に関する組織的関与に課題を残している。「その他」では、回答選択肢とは異なるが成績分布への異なるアプローチの工夫が行われていると思われる。

照会事項5 FD研修会の実施状況（本学主催）

融合学域、医学類をはじめとして、部局独自のFD研修会について、近年、充実が見られる。この傾向は、分野ごとにおける教育・学生支援に関する新たなテーマや課題が多いことを表していると言えよう。組織改組やカリキュラム改善等を行った部局においては、直面する新しい課題について、FD研修会のテーマに掲げられている。対面及びオンラインを含めた教授法、学修支援ツールの使い方、研究指導、学生のこころのケア、留学生対応など、幅広いテーマが話題となっている。これらの部局主催FD研修会の中には、教育、研究に関して共有可能なテーマのFD研修会については全学に公開・広報されることが望まれることから、教学マネジメントセンターにおいて共催支援、学内広報支援を行うケースが徐々に増えてきている。

今後の課題

今回、教学マネジメントの観点から、シラバスにおける学修目標・学修成果の記載状況、講義スケジュール（授業計画）の記載状況を新たに点検することにしたこと、さらには、卒業・修了者アンケート結果等を活用しながら、授業改善だけではなく、学位プログラムレベルのカリキュラム改善に着目するようにしたことから、照会事項の改善充実を図った。それらを踏まえて、照会事項1～5の回答を総括し課題について指摘したい。

シラバス改善のための取組みの実施状況に関して、学修目標・学修成果、講義スケジュール、AL関連の記載および英文での入力状況については大半の教育担当部局で確認が行われていた。一方で、個人レベルでの点検実施や、誰がどこで点検したのかが明記されていないケースがいくつか見られた。令和6年度下半期より教務委員会を中心としたシラバス点検体制を整備し、一層の改善充実に努めている。

次に、授業方法・カリキュラム改善のための取組み等の実施状況では、授業評価アンケートおよび卒業・修了者アンケート結果を積極的に活用している教育担当部局があることが明らかになったが、授業評価アンケート結果で課題のある科目への対応が十分行われていないこと、卒業・修了者アンケート結果の分析、それを反映した改善活動が不十分であること、授業参観が不十分であること、課題のある成績基準改善が十分進んでいないこと、偏った成績分布への対応が不十分であること、など、今後の課題も見えてきた。

教員相互の授業参観については、Web上で確認できる授業カタログの活用は一定程度進んでいることが確認できたが、具体的な授業参観についてはまだまだ低調であることも判明した。ただし、授業参観以外の多様な形態での教員間での情報共有、情報公開は実施されていることが「その他」への回答から見て取れるため、今後の改善充実を活かしていきたい。

成績評価基準等の作成・検証状況に関しては、成績評価分布の部局内での共有は進んでいるが、偏った成績分布への対応が不十分な点が明らかになっている。このことは、成績評価に関する組織的な関与について、更なる改善充実を進める必要がある。

1－2 各部局等からの回答をもとにした点検

学修目標・学修成果を明確にしたシラバス作成、それに基づく授業実施および成績評価、授業評価アンケートおよび卒業・修了者アンケート結果による改善がよりよい授業を作る上での PDCA サイクルであり、今後の改善が一層必要であることが、今回の照会事項への回答から明らかになった。

令和 5 年度に策定した「金沢大学における教育の内部質保証に関する指針」（後掲：4 資料編）に明記されているとおり、各部局からの FD 活動報告は学位プログラムレベルや授業科目レベルのモニタリング機能として重要な位置付けとなっている。3 つのポリシーを念頭においてカリキュラム改善、授業改善が一層進むよう、当該年度の自己評価及び総評、さらには、翌年度に向けた改善計画を通して、学生のためにより良い教育を提供できるように努めていく必要がある。毎年のように新たな課題が出てくるが、教育担当部局として学修者重視の姿勢の下、教員間での認識を共有し、課題、解決方法を組織として検討するという体制を構築・維持していくことが、自己評価 4（大いに評価出来る）につながると考えられる。

1-3 FD委員会の活動

1-3 FD委員会の活動

令和7年度における活動		
令和7年4月4日	(金)	第1回全学FD研修会「新任教員説明会＜教育・学生編＞」開催
令和7年7月16日	(水)	第2回全学FD研修会「大学院における分野横断型教育の意義と価値～ラボローテーションを中心に考える～」開催
令和7年8月1日	(金)	第1回FD委員会開催
令和7年8月28日	(木)	第2回FD委員会開催（書面附議）
令和7年10月21日	(火)	第3回全学FD研修会「学士課程の共通教育に求められるコンセプトと設計～金沢大学共通教育改革を中心に～」開催
令和7年12月1日	(月)	第3回FD委員会開催
令和7年12月5日	(金)	第4回全学FD研修会「FD活動報告書成果発表会」一学類等における組織的FDの取組事例一開催
令和7年12月23日	(火)	第1回FD・SDラウンジ
令和8年2月17日	(火)	第2回FD・SDラウンジ
令和8年3月6日	(金)	第4回FD委員会開催（書面附議）
令和8年3月26日	(木)	金沢大学 教学マネジメントセミナー2026 「多文化共修を通じた学修成果を考える～効果的な授業設計と運営方法を参考に～」開催

- 各委員会の協議・報告事項及び議事要旨については下記にて公開している。
「アカンサスポータル」→「業務」→「業務マニュアル等リンク集」→
「会議」→「学内会議の議事要旨等」
<https://manual.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.php/gakunaikaigi/>（学内限定）
- 各研修会（共催企画は除く。）の動画又は資料については本学ポータルサイト（アカンサスポータル）にて公開しているので、教職員は随時閲覧可能である。

1-3 FD 委員会の活動

● 【研修会】

第 1 回全学 FD 研修会「新任教員説明会＜教育・学生編＞」		
主 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会及び教学マネジメントセンター	
日 時	令和 7 年 4 月 4 日（金） 10 時 00 分～11 時 55 分	
会 場	総合教育講義棟 2 階 A1 講義室	
対 象	令和 6 年度研修会（令和 6 年 4 月 4 日開催）以降に本学に採用された教員を主とし、関心のある教員や学務系職員の参加も可能	
参 加 者	59 名	
概 要	新任の教員を主な対象とする全学の研修会は、平成 20 年度から毎年度開催している。従来は、「教養教育担当に関する初任者研修」（共通教育機構が実施、平成 16～18 年度）、「新任教員等研修会（兼共通教育担当に関する研修会（初任者対象））」（教育担当理事と共通教育機構長の連名で実施、平成 19 年度）として開催されてきた。 本学における授業支援体制と学生支援の取組を把握することで、教育体制全般に対する理解を深めることを目的とする。	
プログラム	(1) アカサポータル及び教務システムの活用 (森 祥寛 学術メディア創成センター 助教) (2) 学生指導と支援 (尾崎 紀之 学長補佐（入試・学生募集・高大院接続・学生支援担当）) (3) 学生の心のケア及び学生相談（足立 由美 保健管理センター 教授） (4) FD 及びシラバス（林 透 教学マネジメントセンター 教授）	
アンケート結果抜粋	・ 9 月に着任したため、着任直後に知りたかった。動画のアーカイブを残し、いつ着任しても見れるようにしてほしい。 ・ 現実の学生対応はいろいろと難しいと思うが、まず基本的な指針や体制を示していただいてありがたかった。	

第 2 回全学 FD 研修会「大学院における分野横断型教育の意義と価値～ラボローテーションを中心に考える～」		
主 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会	
共 催	教務委員会、教学マネジメントセンター	
日 時	令和 7 年 7 月 16 日（水） 10 時 00 分～12 時 00 分	
会 場	Zoom によるオンライン開催	
参 加 者	58 名	
概 要	東北大学における先進的な取組に関する基調講演に加え、本学における異分野研究探索（ラボローテーション）に関する事例紹介を行うことを通して、大学院における分野横断型教育の意義と価値に関し参加者とともに考えた。	
プログラム	・ 基調講演「東北大学大学院における分野横断型教育とトランスファラブルスキル養成～大学院学生に求められる新しい学びの姿～」 (講師：安藤 晃 東北大学 高等大学院機構大学院改革推進センター長) ・ 事例紹介 「人間社会環境研究科における異分野研究探索の授業実践」 (人間社会研究域人文学系 猪瀬 千尋 准教授) 「自然科学研究科における異分野研究探索の授業実践」 (理工研究域数物科学系 長尾 秀実 教授) 「医薬保健学総合研究科における異分野研究探索の授業実践」 (医薬保健研究域医学系 三枝 理博 教授)	

1-3 FD 委員会の活動



アンケート結果抜粋

- ・東北大学の先進的な取組や組織体制を知ることができ、有意義だった。
- ・分野横断型教育を全学的に推進するにあたり、あまり馴染まない分野もあると思われるが、教員側の理解がより一層必要であるように感じた。

第3回全学FD研修会「学士課程の共通教育に求められるコンセプトと設計～金沢大学共通教育改革を中心に～」

主催	教育企画会議専門委員会FD委員会
共催	ソーシャルインパクト創出のための多文化共修キャンパス形成推進本部・教務委員会・教学マネジメントセンター・国際基幹教育院FD委員会・公益社団法人大学コンソーシアム石川
日時	令和7年10月21日(火) 13時00分～15時00分
会場	Zoomによるオンライン開催
参加者	130名
概要	岡山大学において令和7年度から導入した新しい共通教育に関する基調講演に学びながら、高大接続を意識しつつ、これからの大学に求められる共通教育のあり方について、参加者とともに意見交換した。
プログラム	・基調講演 「岡山大学Target2025（教育改革）のコンセプトと設計～これからの共通教育に求められる学びとは～」 (講師：和賀 崇 岡山大学 教育企画室 准教授) ・取組報告 「金沢大学における共通教育改革」 (国際基幹教育院長 垣内 康孝 教授) 「金沢大学における多文化共修科目の設計」 (学長補佐(企画評価・教育改革・学生募集・高大院接続担当) 谷内 通 教授)

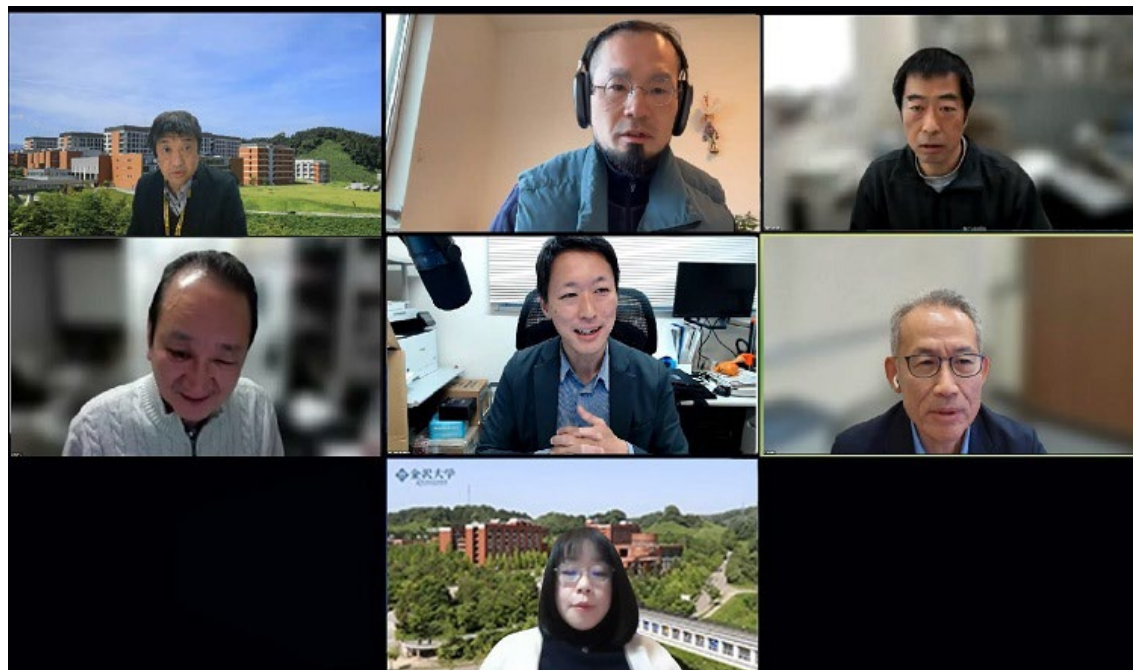


1-3 FD 委員会の活動

アンケート 結果抜粋	・入試改革を起点として、新指導要領を踏まえた全学的な初年次教育改革へと展開していった岡山大学での取組の流れをととても分かりやすく説明して頂き、学ぶところが多かった。 ・金沢大学における共通教育改革の歴史や現状、今後目指していく方向性が分かり、大変参考になりました。
---------------	---

第4回全学FD研修会「FD活動報告書成果発表会ー学類等における組織的FDの取組事例ー

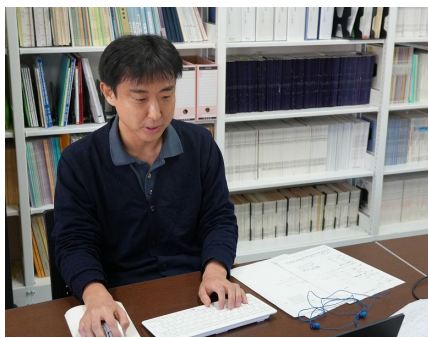
主 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会及び教学マネジメントセンター
日 時	令和7年12月5日（金） 10時00分～11時50分
会 場	Zoomによるオンライン開催
参 加 者	41名
概 要	金沢大学では、毎年度部局ごとの組織的なファカルティ・ディベロップメント(FD)活動について「金沢大学 FD 活動報告書」としてまとめ、公開することで活動の共有と振り返りを図っている。令和6年度FD活動報告書においては、学問分野の特性に応じた活発な取組みを紹介しており、部局を越えて参考になる事例が多い。教学マネジメントセンターによる令和6年度FD活動に関する概要報告に続き、今回は、経済学類、学校教育学類、数物科学類、電子情報通信学類及び医学類におけるFD活動を全学的に共有した。



プログラム	・令和6年度FD活動に関する概要報告 (報告者：教学マネジメントセンター副センター長 林 透 教授) ・各学類等におけるFD活動報告 「経済学類におけるFD活動」 (人間社会研究域経済学経営学系 鈴木 智気 講師) 「学校教育学類におけるFD活動」 (人間社会研究域学校教育系 江藤 望 教授) 「数物科学類におけるFD活動」 (理工研究域数物科学系 岩崎 宏 准教授)
-------	---

1-3 FD委員会の活動

	「電子情報通信学類におけるFD活動」 (理工研究域電子情報通信学系 松田 昇也 准教授) 「医学類におけるFD活動」 (医薬保健研究域医学系 太田 邦雄 教授)
アンケート 結果 抜 粋	・各部局で講義内容等に合わせて様々な取り組みが行われていることを具 体例を通して説明いただけてとても参考になりました。

第1回FD・SD ラウンジ「エクセルと生成AIを活用したデータ集計・可視化の方法を学ぶ ～DX・IR基礎講座(第2弾)～」	
主 催	教学マネジメントセンター
日 時	令和7年12月23日(火) 13時30分～15時00分
会 場	Zoomによるオンライン開催
参 加 者	54名
概 要	令和6年度開催し好評を博した日常業務に活用できるDX(デジタル・トランスフォーメーション)やIR(インスティテューショナル・リサーチ)に関連した基礎講座の第2弾を開催した。講演の中では、ダミーデータによる実践用デモも行われた。
	
プログラム	エクセルと生成AIを活用したデータ集計・可視化の方法を学ぶ ～DX・IR基礎講座(第2弾)～ (講師: 大関 智史 宮崎大学 IRセンター専任講師/金沢大学教学マネジメントセンターアドバイザー)

第2回FD・SD ラウンジ「今改めて、学修ポートフォリオの機能や効果について考えてみよう」	
主 催	教学マネジメントセンター
日 時	令和8年2月17日(火) 10時00分～11時50分
会 場	Zoomによるオンライン開催
参 加 者	101名
概 要	学修ポートフォリオの現状や可能性について事項整理しながら、効果的・効率的なシステム構築や具体的な運用のあり方について、議論を行った。

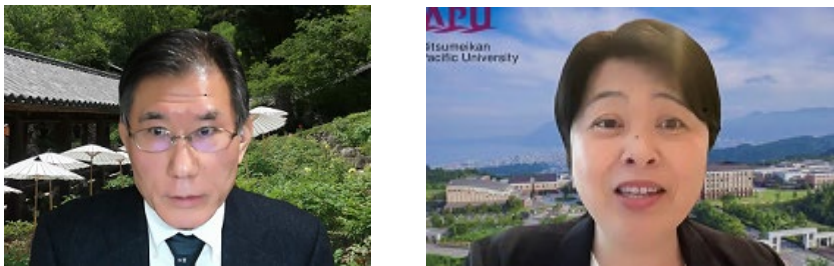
1-3 FD委員会の活動

	
プログラム	・講演 (1) 「学修支援システムとしての学修ポートフォリオの機能と効果～ユーザーインターフェイスを重視した設計を中心に～」 (講師：長谷川 忍 北陸先端科学技術大学院大学 遠隔教育研究イノベーションセンター長・教授／金沢大学 教学マネジメントセンター アドバイザー) ・講演 (2) 「20年の歴史を誇る九工大「学修自己評価システム」の機能と運用～学士課程から大学院課程への展開～」 (講師：大石 哲也 九州工業大学 学習教育センター副センター長・教授)
アンケート 結果 抜粋	・他大学様の取り組みを知ることができ、非常に有意義な時間となりました。 ・学生が自分事として用いるための制度・仕組み、仕掛けのあり方が課題と感じます。

金沢大学 教学マネジメントセミナー2026

「多文化共修を通じた学修成果を考える～効果的な授業設計と運営方法を参考に～」

主 催	教育企画会議専門委員会 FD 委員会及び教学マネジメントセンター
共 催	ソーシャルインパクト創出のための多文化共修キャンパス形成推進本部多文化共修部会、金沢大学教務委員会、公益社団法人 大学コンソーシアム石川
日 時	令和8年3月26日(木) 10時00分～12時00分
会 場	Zoomによるオンライン開催
参 加 者	74名
概 要	他大学における多文化共修に関連した効果的な授業設計と運営方法に学ぶため、大正大学 井上 雅裕 教授と立命館アジア太平洋大学 カッティング美紀 教授を講師にお招きし、多文化共修を通じた学修成果について、参加者とともに考えた。

	
プログラム	・基調講演 (1) 「大学教育における多文化共修の可能性と課題」

1-3 FD 委員会の活動

	～国際 PBL やマイクロクレデンシャルの実践と機能から学ぶ～」 (講師：井上 雅裕 大正大学 教授, 芝浦工業大学 名誉教授 一般社団法人日本マイクロクレデンシャル機構 理事) ・基調講演 (2) 「多文化共修を支援するスチューデント・アシスタント (SA) の機能と効果 ～学修者中心の教育の実現のためのプラットフォーム～」 (講師：カッティング 美紀 立命館アジア太平洋大学 教育開発・学修支援センター長・教授)
アンケート 結果 抜 粋	・グローバルコンピテンシー含め教育効果可視化部分が非常に参考になりました。 ・制度と具体的実践の双方の内容からなる大変充実したセミナーでした。

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

令和7年度における全学及び各部局等のFD活動は種々実施され、全学のFD研修会（前掲：1-3）及び各部局等のFD研修会（後掲：2 各部局等のFD活動）も多数実施された。
 その中で、特色あるFD活動を各々1つピックアップし、紹介する。

【学域等及び研究科単位】

学域（融合学域、人間社会学域、理工学域、医薬保健学域）、研究科（新学術創成研究科、人間社会環境研究科、自然科学研究科、医薬保健学総合研究科）、国際基幹教育院で実施している特色あるFD活動は次のとおり。

部局名	FD活動
融合学域	融合学域3学類は、融合研究域融合科学系に所属する教員が主となり教育担当していることから、FD活動は3学類合同で実施し、相互の連携を図り、融合学域としての教育組織体制を構築している。 令和3年度に融合学域先導学類を設置し、観光デザイン学類、スマート創成科学類を順次設置し、3学類体制となった。既存の学域・学類からの異動、新規採用教員等、教員も年々増加している状況で、融合学域の理念である「文理医融合教育によりイノベーションを起こす人材の養成」に向け、FD活動を行っている。 令和7年5月には、「融合とは何か？」について、創設メンバーから当時の策定の経緯などの説明を受け、融合研究域所属教員で共有し、それぞれの考え方の重なりや違いについて意見交換、問題提起を行う融合系将来検討会を開催し、今後の学生の指導方針等に役立てることとした。 融合学域FD研修会は定期的に企画し、令和4年度7回、令和5年度10回、令和6年度7回、令和7年度2回と4年間で26回開催となった。 また、令和5年度からは教員の研究シーズ紹介を定期的 to 実施し、各教員の研究内容、進捗状況等の紹介を受け、自身の研究との融合、共同研究につなげる可能性を探っている。 加えて、融合系教員は、令和7年度に設置した新学術創成研究科総合知創出科学専攻担当をしており、総合知創出科学専攻のFD活動を兼ねて各活動を実施している。
人間社会学域	令和7年度は、人間社会学域として4回のFD研修会を実施した。詳細は以下のとおりである。 ① 令和7年6月11日に経済学類主催により、「あなたの就職活動に『国家公務員』という選択肢を」と題した研修会を実施した。講師には、人事院公平審査局長の役田平氏を迎えた。 ② 令和7年9月25日、学校教育学類主催により、共同教員養成である富山大

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

部局名	FD活動
	学との合同研修会を実施した。研修では、両大学の教育実習体制について報告を行うとともに、それぞれの教育効果について協議した。 ③ 令和7年12月18日、経済学類主催により、「フューチャー・デザインを学ぶ」と題してFDセミナーを開催した。 ④ 令和8年2月3日、総合相談室の高山知明先生を講師に迎え、「教員のためのリスクマネジメント」と題したハラスメント防止研修会を実施した。 (対面での参加は38名参加 オンデマンド配信も実施、その後、収録ビデオは総合相談室の研修用として活用される予定)
理工学域 自然科学研究科	理工学域・自然科学研究科では、3月11日（水）13時30分からオンラインにて第17回理工FDシンポジウムを開催した。新型コロナウイルスの大流行以降、各教員はオンデマンド・オンライン・ハイブリッド・ハイフレックスなどの授業形態のスキルを身に付けてきた。令和6年度までのシンポジウムでは各々の講義形態の学習効果（学生の理解度）を解析する試みが行われてきた。 現在までのシンポジウム内容を基に、令和7度の「特別講演」では、教育効果を高める学び方として注目されているPBL（Problem/Project Based Learning）について実績のある東京都市大学教育開発機構 教授、同機構副機構長 伊藤 通子 先生に、「理工系PBL科目の実践と、PBLを軸としたカリキュラム設計」という題目で特別講演をいただき、PBLによる授業の実施をする際のポイントを解説していただいた。参加人数は75名であった。 PBLの歴史的背景も紹介いただき、具体的な実践方法も解説いただいてPBLを利用した授業により学生が効果的な学びを深めることができることを知ることができた。また、卒業研究などでのPBLを利用した具体例も紹介いただいた。講演後は活発な質疑応答が行われ、授業改善に向けて様々な知見を得ることができた。
医薬保健学域 医薬保健学総合研究科	医学類FD委員会が主体となり、令和7年度は学内外の講師を招き、計7回の医学系FD研修会を実施した。内容は、医学類の教育理念・カリキュラムの共有に加え、総合診療医養成、多職種連携教育（IPE）、ハラスメント防止、評価手法（OSCEにおけるIRT導入）など、教育の質向上に資する多様なテーマを扱った。特に、医療人材教育研究センターや金沢学術アカデミーと連携し、医学系に加えて薬学系・保健学系教員も参加可能とすることで、IPE推進に資する学類横断的なFD体制を構築している点が本部局の特徴である。また、資料および録画動画をLMS「医学FD」に掲載し、教員が随時視聴可能な環境を整備している。さらに、参加回数が年2回未満の教員にはオンデマンド教材の視聴とレポート提出を課し、継続

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

部局名	FD活動
	的なFD参加を促進している。
新学術創成研究科	本研究科は3つの専攻で構成されており、それぞれの専攻の特性を踏まえ、FD研修会は専攻単位で実施している。 総合知創出科学専攻は、融合学域から接続される専攻であることから、融合学域と合同でFD研修会を開催している。令和7年度は、研究者倫理やハラスメントをテーマとした研修会を実施したほか、教員による研究シーズの紹介を定期的に行い、各教員の研究との融合や共同研究への発展可能性を探っている。また、令和7年度は授業の英語化率及び具体的な対応方法を調査し、その結果を取りまとめて専攻会議で共有した。他の教員の工夫や事例を共有することにより、各教員が授業の英語化推進を検討する契機とした。 融合科学共同専攻は、北陸先端科学技術大学院大学との共同専攻であるため、両大学の教員合同で年1回FD研修会を開催している。専任教員による研究内容の紹介を通して相互理解を深めるとともに、共同研究の可能性について検討する機会としている。これまでの主なテーマとしては、令和5年度「社会人の受入れ」、令和6年度「学生募集」「異分野融合科目の検討」「異分野融合型研究支援制度」、令和7年度「融合人材の育成」を取り上げ、活発な意見交換を行ってきた。また、令和6年度からは北陸先端科学技術大学院大学のサテライトオフィスにおいて対面開催とし、教員間の交流促進の場としても機能している。 ナノ生命科学専攻では、専攻特有の課題に即したテーマを設定し、FD研修会を実施している。令和5年度は「留学生の受入れ・教育における注意点」についてワークショップ形式で実施した。令和6年度は、専攻の授業内容や研究指導、奨学金制度について理解を深める内容とし、令和7年度は総合相談室の相談員を講師に迎え、「教員のためのリスクマネジメント」をテーマに研修を実施し、活発な意見交換が行われた。 このように、各専攻において求められるテーマを踏まえたFD研修会を実施しており、今後も各専攻が抱える課題に基づき、継続的に研修会を計画・実施していく予定である。
人間社会環境研究科	本研究科では、FD活動を通じて大学院担当教員に新たに求められる運営知識、問題や課題の意識向上を目指している。令和7年度は4回のFD研修会を実施した。第1回から第3回のテーマは、高度専門職人材養成のための諸課題（第1回）、ハラスメントに関する教員側の意識の向上（第2回）、人文系大学院におけるデジタル教育（第3回）であった。第4回のFD研修会は、人間社会環境研究科Xプログラム主催の「第2回 未来知融合シンポジウム」と兼ねたもので、人間行動データの収集・管理・利活用における課題や今後の可能性について、外部からの講演者3名による事例報告について学び、活

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

部局名	FD活動
	発な議論を行うことができ、令和8年4月の「データプライバシーエキスパート養成プログラム」開始に向けた準備として大変有益であった。 本研究科の現在の大きな問題として、博士後期課程において標準修了年限を超えて在籍する学生の数が多いことがある（令和7年度末時点での博士後期課程在籍者87名中、長期履修者を除く24名が3年を超えて在籍）。また、博士後期課程学生の投稿論文執筆の面で、令和7年度修了者（12名）の在学中の投稿（且つ採択）論文数は1名あたりの平均で3.5本であり、数の上では少なくないが、学外の学術雑誌（特に国際的な学術誌）への投稿が少ないのが現状である。こうした問題に対処するため、令和8年度以降、学生の論文執筆（学位論文・投稿論文の双方）に対する教員の指導力を改善するためのFD活動に取り組む必要がある。
国際基幹教育院	国際基幹教育院では、外国語教育系とGS教育系が協力し、分野の多様性を活かしたFD活動を展開している。令和7年度は令和6年度から両系合同で開始した「Open Class Week」について、より多くの教員が参加できるよう、参観可能期間を前年度の2週間からクォーター全体とする「Open Class Quarter」として実施、27名の教員（外国語系は全教員参加）が合計119コマの授業を公開した。生成AIを利用したクラスなどもあり、多くの教員が系を超えて複数の授業を参観した。後半には合同で懇親会を開催し、学問分野を超えて教授法についての活発な意見交換が行われた。終了後実施した簡易アンケート調査では、相互の学びについて好意的な意見が多くみられた。また令和8年度から始まる多文化共修授業に向けてのテーマ、令和6年度から引き続いての生成AIと教育に関するテーマを積極的に扱い、英語授業の強化に向けた研修もこれまでに引き続き力を入れた。

【学類単位】

今回は、融合学域3学類、地域創造学類、物質化学類、フロンティア工学類及び薬学類で実施している特色あるFD活動を紹介する。

○融合学域3学類（先導学類・観光デザイン学類・スマート創成科学類）

取組名称	GPS-Academic受験結果から
開催日	令和7年7月31日
参加人数 (概数)	25名

融合学域では、令和5年度、令和6年度に先導学類学生を対象に、GPS-Academic受検を課し、その結果について融合学域FD研修会で共有、学生の問題解決能力、意識変化等について意見交換を行った。

GPS-Academic は答えが1つではない問いに対して問題を解決する力を「思考力」「姿勢態度」「経験」の3観点で測定。

2年間のデータより、学生の問題解決能力の変化、意識変化等が確認できた。

各学年の結果は、他大学等を含めた全受検者の同一学年の結果より、思考力、姿勢・態度、経験のほぼすべての項目で高い結果となっている。

令和5年度3年の学生が令和6年度4年に受検した自己評価結果では、複数の項目で伸びを感じていることがわかった。

目標・カリキュラム・授業内容の理解については、令和5年度と令和6年度の同学年の比較でも、複数の項目で伸びが確認できた。

先導学類の結果を踏まえ、観光デザイン学類及びスマート創成科学類においても、学生の問題解決能力等の向上に向け、意見交換を行った。

受検者人数

	1年	2年	3年	4年	計
令和5年度	16	38	36	—	90
令和6年度	15	13	35	50	113

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

GPS-Academic 測定項目「答えがひとつでない問題を他者と関わり合いながら問題解決する力」

Benesse i-Career

直接評価
(スコア)

間接評価
(達成率&回答)

大項目	測定項目	下位項目	内容	目安時間	新・社会人基礎力	学力の3要素
考え抜く力 思考スキル	思考力総合スコア (問題を解決する思考スキル)	批判的思考力	情報を抽出し吟味する力 ★論理的に組み立てて表現する	45分	考え抜く力	思考、判断、 表現力
		協働的思考力	他者との違い、共通点を理解する力 ★社会に参画し人と関わる			
		創造的思考力	情報を関連付けられる力 ★問題をみだし解決策を生み出す			
他者と関わり合いながら 働く力 姿勢・態度	レジリエンス (精神的なタフさ)	ストレス耐性	感情の制御	10分	チームで働く力	主体性をもって 多様な人々と 協働して 学ぶ態度
		回復力	立ち直りの早さ			
	リーダーシップ (物事に向かう前向きさ)	自己統制力、柔軟性	状況に応じ冷静に対応する			
		自主性、率先性	自ら先頭に立って進める			
	チャレンジ精神、開放性	未知の物に挑戦する				
	コラボレーション (他者への働きかけ)	持続力、誠実性、勤勉性	粘り強くやり抜く			
		共感性	相手の立場に立とうとする			
		外向性、緩和性	他者と関わり合うとする積極性			
前に踏み出す 経験	経験総合 (認識している問題解決の経験)	挑戦する経験	挑戦する経験	5分	前に踏み出す	主体性をもって 多様な人々と 協働して 学ぶ態度
		自己管理	続ける経験			
			ストレスに対処する経験			
			多様性を受容する経験			
		対人関係	関係性を築く経験			
			議論する経験			
			課題を設定する経験			
何を学ぶか、どのように学ぶか アンケート	学生意識調査 全国標準アンケート	計画・実行	解決策を立案する経験	20分	★記述式で測定 ※大学独自設問について 25年度より選択設問最大50問に拡大	
			実行・検証する経験			
		新入生版	大学納得度・志望度、退学検討 教育力認識、大学観 など			
		在校生版	大学満足度、カリキュラム評価、 イメージ変化、授業役立ち度、など			
	+大学独自設問	選択設問15問、自由記述3問				

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

2024年度貴学受検状況

Benesse i-Career

受検期間：2024/7/10～12/28

受検対象	2023		2024	
	登録人数	受検人数	登録人数	受検人数
融合学域先導学類_1年	51	16	53	15

受検対象	2023		2024	
	登録人数	受検人数	登録人数	受検人数
融合学域先導学類_2年	55	38	55	13

受検対象	2023		2024	
	登録人数	受検人数	登録人数	受検人数
融合学域先導学類_3年	65	36	57	35

受検対象	2023		2024	
	登録人数	受検人数	登録人数	受検人数
融合学域先導学類_4年	—	—	65	50

※入試区分は学生本人が選択しています

※GPS-Academicシステム上、学域・学類の表示が学部・学科となる場合や略称を用いる場合がございます。

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

問題解決力（1年生）

Benesse i-Career

受検対象	受検年度	受検人数	思考力				姿勢・態度			経験			
			思考力総合	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	経験総合	自己管理	対人関係	計画・実行
全受検者計	2024入学_1年	-	39.3	37.5	37.0	39.3	47.6	47.0	49.3	56.5	53.9	59.8	55.6
先導学類	2023	16	52.7	51.1	50.5	54.0	51.2	51.1	53.1	58.1	55.8	67.2	51.1
	2024	15	53.0	52.2	55.2	52.2	44.3	51.0	48.7	56.7	56.2	59.4	54.3

差分表

※受検対象ー比較対象の差分を表示しています。

受検対象	比較対象	思考力				姿勢・態度			経験			
		思考力総合	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	経験総合	自己管理	対人関係	計画・実行
先導学類	全受検者計	+13.7	+14.7	+18.2	+12.9	-3.3	+4.0	-0.6	+0.2	+2.3	-0.4	-1.3
先導学類	貴学_23年度1年	+0.3	+1.1	+4.7	-1.7	-6.9	-0.1	-4.3	-1.4	+0.4	-7.7	+3.2

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

問題解決力（2年生）

Benesse i-Career

受検対象	受検年度	受検人数	思考力				姿勢・態度			経験			
			思考力総合	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	経験総合	自己管理	対人関係	計画・実行
全受検者計	2023入学_2年	-	39.7	38.1	37.2	40.0	48.1	46.7	47.9	56.5	53.5	58.9	57.0
先導学類	2023	38	52.4	53.2	53.2	51.3	46.5	48.3	48.4	55.3	53.0	58.5	54.4
	2024	13	53.4	56.2	52.1	51.5	49.8	49.6	49.3	53.8	50.9	59.5	51.2

差分表

※受検対象ー比較対象の差分を表示しています。

受検対象	比較対象	思考力				姿勢・態度			経験			
		思考力総合	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	経験総合	自己管理	対人関係	計画・実行
先導学類	全受検者計	+13.7	+18.1	+14.9	+11.5	+1.7	+2.9	+1.4	+2.7	-2.6	+0.6	-5.8
先導学類	貴学_23年度2年生	+1.0	+3.0	-1.1	+0.2	+3.3	+1.3	+0.9	-1.5	-2.1	+1.0	-3.3

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

問題解決力（3年生）

Benesse i-Career

受検対象	受検年度	受検人数	思考力				姿勢・態度			経験			
			思考力総合	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	経験総合	自己管理	対人関係	計画・実行
全受検者計	2022入学_3年	-	41.4	39.9	39.3	41.5	48.2	47.2	48.4	55.8	52.3	59.2	55.8
先導学類	2023	36	54.0	53.3	54.8	54.6	51.8	52.3	49.9	59.5	56.7	65.0	56.8
	2024	35	52.3	51.4	52.2	51.6	50.3	53.5	50.5	60.0	57.0	64.7	58.2

差分表

※受検対象ー比較対象の差分を表示しています。

受検対象	比較対象		思考力				姿勢・態度			経験			
			思考力総合	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	経験総合	自己管理	対人関係	計画・実行
先導学類	全受検者計		+10.9	+11.5	+12.9	+10.1	+2.1	+6.3	+2.1	+4.2	+4.7	+5.5	+2.4
先導学類	貴学_23年度3年生		-1.7	-1.9	-2.6	-3.0	-1.5	+1.1	+0.6	+0.5	+0.3	-0.3	+1.4

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

問題解決力（4年生）

Benesse i-Career

受検対象	受検年度	受検人数	思考力				姿勢・態度			経験			
			思考力総合	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	経験総合	自己管理	対人関係	計画・実行
全受検者計	2021入学_4年	-	40.6	38.8	38.3	41.5	50.5	49.7	49.5	60.2	57.2	63.4	60.1
先導学類	2024	50	53.7	53.3	51.0	52.9	51.6	52.8	49.4	60.4	58.3	65.7	57.3

差分表

※受検対象ー比較対象の差分を表示しています。

受検対象	比較対象		思考力				姿勢・態度			経験			
			思考力総合	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力	レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	経験総合	自己管理	対人関係	計画・実行
先導学類	全受検者計		+13.1	+14.5	+12.7	+11.4	+1.1	+3.1	-0.1	+0.2	+1.1	+2.3	-2.8

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

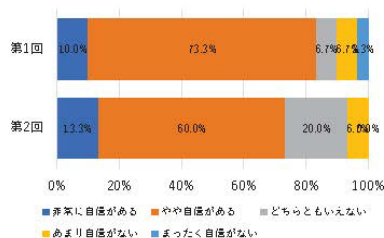
1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

思考力 自己評価（3年次→4年次）

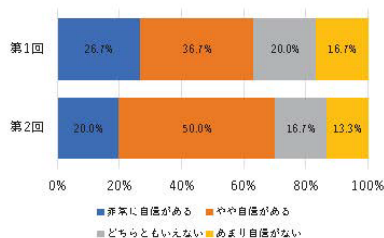
※第1回=3年次、第2回=4年次のデータ

Benesse i-Career

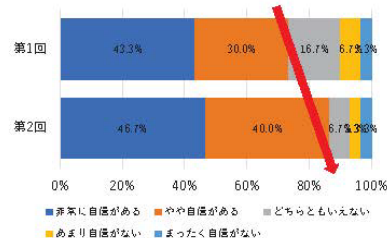
情報を抽出し吟味する力



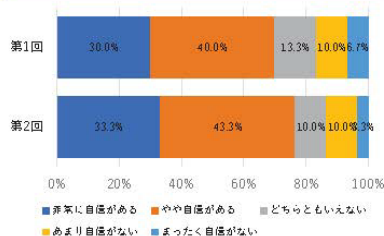
論理的に組み立てて表現する力



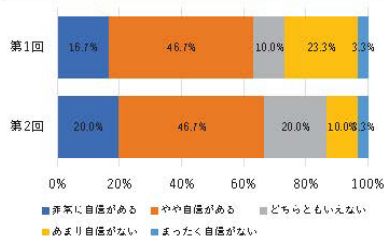
他者との共通点・違いを理解する力



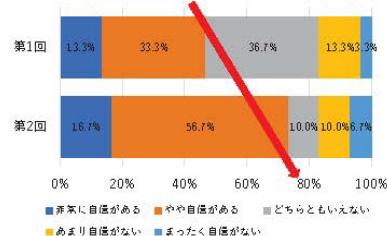
社会に参画し人と関わりあう力



情報に関連づける力・類推する力



問題を見いだし解決策を生み出す力



© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

学びへの意欲（3年次→4年次）

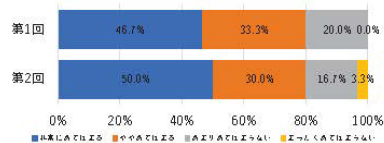
※第1回=3年次、第2回=4年次のデータ

Benesse i-Career

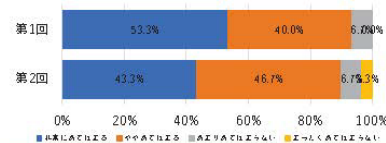
受検回	学びへの意欲
第1回	74.0
第2回	74.2
差分	+0.2



「正解」のない課題であっても、前向きに取り組もうとする



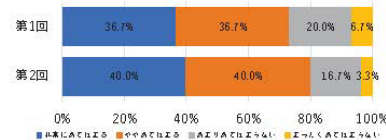
普段から自分なりの意見や視点を持とうとしている



失敗しそうであっても、いろいろなことに挑戦してみたい



考え方や立場の異なるさまざまな人と交流したい



高い目標を持って学ぼうと思っている



© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

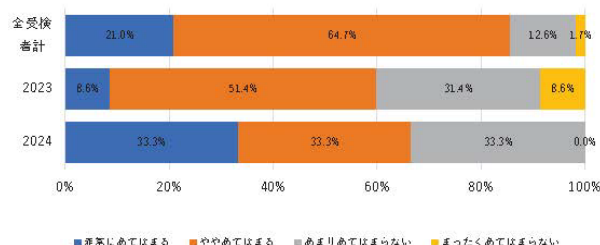
1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

目標・カリキュラム・授業内容の理解（2年生）

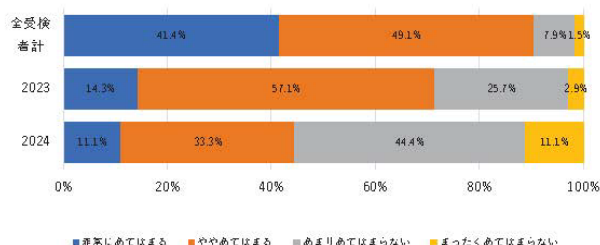
※無回答を除いて集計（23年度:3名、24年度4名）

Benesse i-Career

科目間の関連やカリキュラムの全体像を理解できている

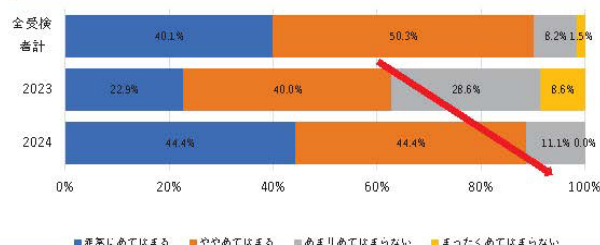


大学は、シラバスやガイダンスなどで個々の授業内容に対する情報を十分に提供している



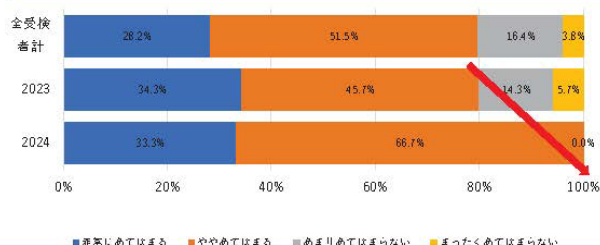
あなたが通う大学で、自分の将来に必要な学びを得ることができると思う

※1～4年生共通設問



所属する学部・学科の教育目標（どのような人材の育成を目指しているか）を知っている

※1～4年生共通設問



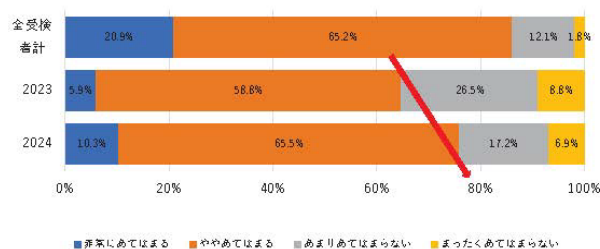
© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

目標・カリキュラム・授業内容の理解（3年生）

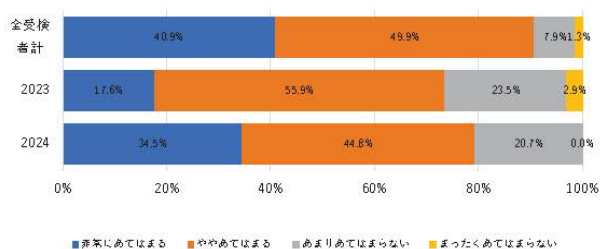
※無回答を除いて集計（23年度:2名、24年度6名）

Benesse i-Career

科目間の関連やカリキュラムの全体像を理解できている

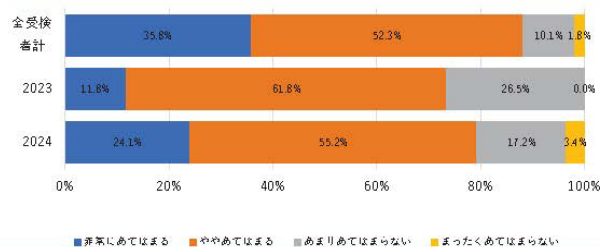


大学は、シラバスやガイダンスなどで個々の授業内容に対する情報を十分に提供している



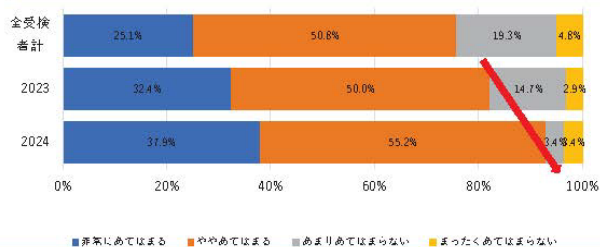
あなたが通う大学で、自分の将来に必要な学びを得ることができると思う

※1～4年生共通設問



所属する学部・学科の教育目標（どのような人材の育成を目指しているか）を知っている

※1～4年生共通設問



© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

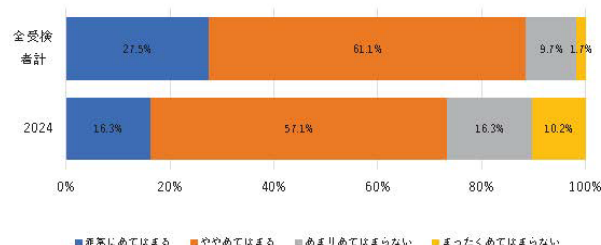
1-4 <ピックアップ>特色あるFD活動

目標・カリキュラム・授業内容の理解（4年生）

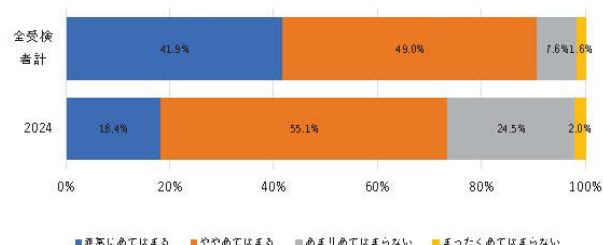
※無回答1名を除いて集計

Benesse i-Career

科目間の関連やカリキュラムの全体像を理解できている

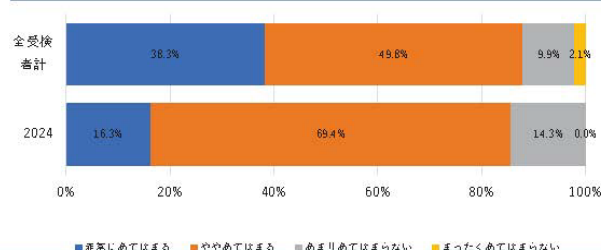


大学は、シラバスやガイダンスなどで個々の授業内容に対する情報を十分に提供している



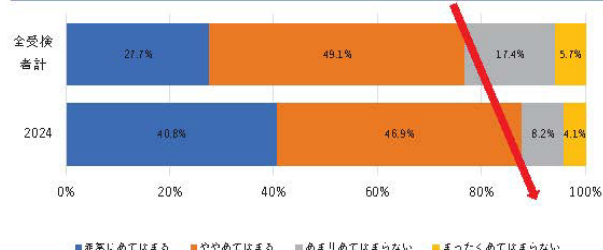
あなたが通う大学で、自分の将来に必要な学びを得ることができると思う

※1～4年生共通設問



所属する学部・学科の教育目標（どのような人材の育成を目指しているか）を知っている

※1～4年生共通設問



○地域創造学類

取組名称	地域創造学教科書作成に関する検討会
開催日	第1回：令和7年8月21日 第2回：令和8年3月10・11日
参加人数 (概数)	第1回：4名 第2回：20名

これまでのFD活動を踏まえたうえで、令和7年度から地域創造学をより体系的に学修するための教科書『地域創造学への招待（仮）』を作成することに着手した。

そこで、まず令和7年8月21日に第1回の教科書検討会を実施した。出版社の編集者を招聘し、編者となる教員と一緒に、執筆者が用意した原稿構想案について検討して、その内容を各執筆者に連絡した。

次の令和8年3月10・11日の第2回の教科書検討会では、出版社の編集者、編者教員、そして、執筆者一同が対面で検討会を実施して、原稿のブラッシュアップを行った。

下図は予定されている目次一覧であり、本教科書は令和8年度中には刊行予定である。

『地域創造学への招待（仮）』	
序章	地域創造学とは何か？：設計科学としての地域創造学
第1部	地域創造学の理論と方法
第1章	持続可能性・自由・共同性を中心とする地域創造学の哲学
第2章	地域診断の方法
第3章	地域調査の方法：質的調査・データ収集・分析と記述
第4章	地域政策の立案：コンテキストと政策過程
第5章	科学技術と地域コミュニティ：対話と実践
第2部	地域社会計画
第6章	コミュニティづくり
第7章	都市計画と地域文脈：建築・都市空間の読解と介入
第8章	縮小と変動の時代に必要「農村戦略論的な考え方」
第9章	地域公共交通の整備とコミュニティの参加
第10章	スポーツクラブによるまちづくり
第3部	地域の産業と資源
第11章	地域産業の振興：現代の内発的発展モデル
第12章	第一次産業・産品に関わる資源活用と環境共生、イノベーション
第13章	地域資源活用と伝統工芸
第14章	持続可能な観光地域づくり戦略
第15章	持続する地域づくりのためのソーシャル・ビジネスのすすめ
第4部	地域の暮らしと福祉
第16章	社会的な居場所づくりの背景と子どもの学習支援事業
第17章	地域社会におけるジェンダー・労働・ケア
第18章	外国人の地方圏への移住：技能実習生に焦点を当てて
第19章	防災・災害復興
第20章	リスク社会とレジリエンス
終章	地域創造学の方法：臨床の学としての設計学習ループ
コラム1	非創造的な者はお断りの街
コラム2	見えない排除から地域の暮らしやすさ考える：性的マイノリティの事例から

○物質化学類

取組名称	FD研修会
開催日	令和7年11月11日
参加人数 (概数)	20名

物質化学類における特色あるFD活動として、毎年開催しているFD研修会を挙げる。FD研修会では、教員が持ち回りで各担当講義の改善状況や課題を提案・共有し、講義運営上の工夫などについて議論を行っている。令和7年度は第24回の開催であり、約20名の教員が参加した。期末試験結果の分析を通じて理解度を把握しようとする試みなど、授業改善に資する具体的な実践例が報告された(図1)。また、卒業研究に関して、学生に対するアンケートおよび指導教員に対するアンケートの結果を踏まえ、教育上の課題と、教育効果の向上に向けた検討を行った。特に、令和7年度は過去10年のデータを集計し、傾向の把握を行った(図2)。学生の、卒業研究に対する積極性は、右肩上がりであり好ましい状況であった。また、近年、指導教員が卒業研究指導に使える時間が減少している懸念があったが、データとして見ると横ばいもしくは若干の右肩上がりであった。

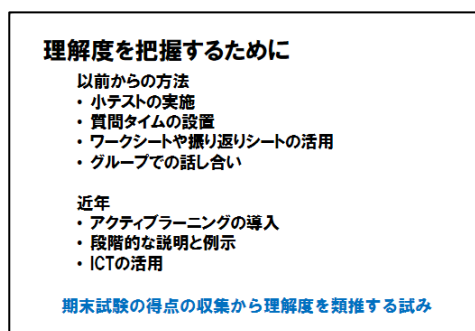


図1. 教員による授業改善実践例の報告スライド例.

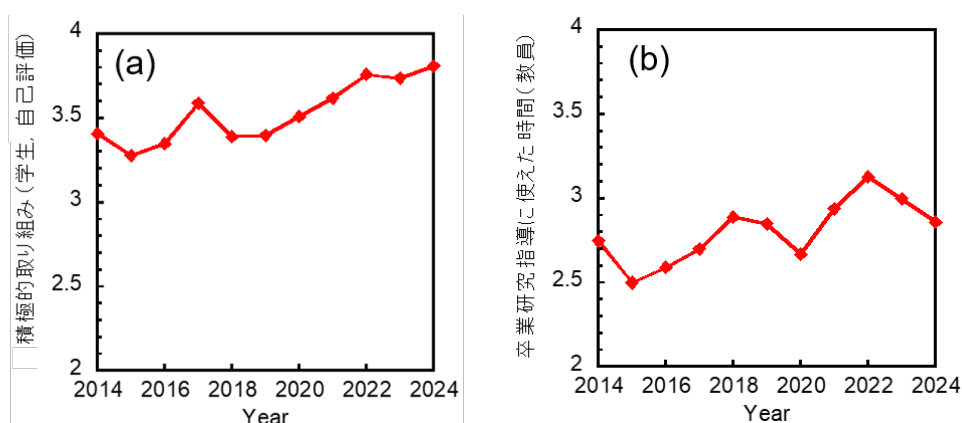


図2. 過去10年間卒業研究アンケート集計結果の例(1~5点, 自己評価). (a)学生が積極的に取り組んだかどうか. (b)指導教員が卒業研究指導に使えた時間.

○フロンティア工学類

取組名称	理工3学類合同FD研修会
開催日	令和8年3月17日（火）
参加人数 （概数）	50名

フロンティア工学類は、機械工学類および電子情報通信学類と合同で、FD研修会を毎年実施している。令和7年度は、研究セキュリティ、インテグリティ確保の一環である「安全保障輸出管理制度」に関して、以下のタイトルの講演をオンラインで実施した。

タイトル：大学の国際化推進と安全保障貿易管理
（講演者：畑 良三・安全保障貿易情報センター 輸出管理アドバイザー兼該非判定アドバイザー）

国立大学法人 金沢大学
安全保障輸出管理制度研修会（2026. 3. 17）

大学の国際化推進と安全保障輸出管理

一般財団法人 安全保障貿易情報センター
輸出管理アドバイザー 畑 良三

(c) CISTEC/Ryozo Hata

1

本研修会では、ヒト・モノ・コトが国内外を行き交うグローバル社会において、研究活動が国際的な影響を持ち得ることを踏まえ、安全保障輸出管理制度の必要性について理解を深めた。特に、輸出管理手続きの中でも重要な「該非判定」について、その基本的な考え方と手続きのポイントについて説明を受けた。教員がこのような国際的な視点に立った社会的責任や倫理的配慮への理解を深めることで、研究指導や授業を通じて学生にもその重要性を伝えることが可能となる。これにより、グローバル社会において責任ある研究・技術開発を担う人材の育成につながり、FDの目的である教育の質の向上にも貢献すると考えられる。

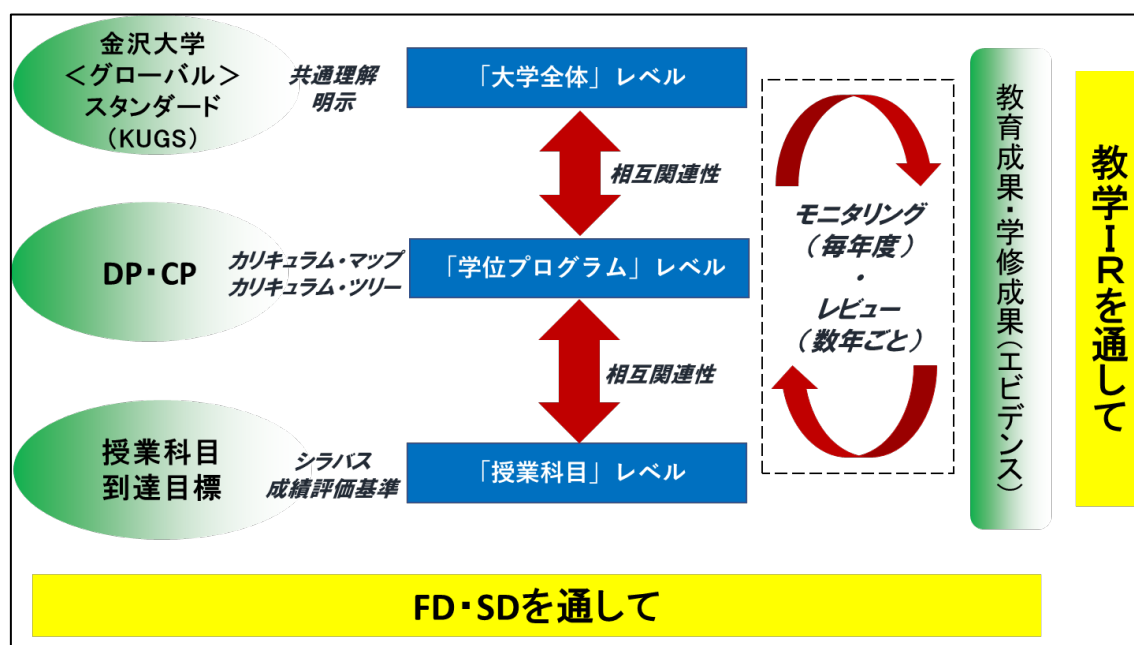
講演後の質疑応答においては、該非判定おける注意点や、学生の研究テーマ設定や学会発表・論文発表において考慮すべき点について詳細にご説明頂いた。

○薬学類

取組名称	令和7年度「薬学系新任教員 教務関連研修会」 令和7年度「薬学系（学類・大学院研究教育）FD 研修会」
開催日	令和7年11月26日，令和8年3月2日
参加人数 (概数)	「薬学系新任教員10名」「FD 研修会50名」
令和7年度も，金沢大学の方針に基づき，教育の質向上を目的としたFD活動を継続的に実施した。毎年実施している薬学系独自のFD研修会に加え，新任教員を対象とした研修会を開催し，教育力向上および教員間での教育理念の共有に努めた。 薬学系FD研修会では，「大学院における分野横断型教育の意義と価値～ラボローテーションを中心に考える～」の動画視聴を実施した。視聴後には，「将来的に試行可能と考えられる分野横断型教育の取り組み案の提案」およびアンケートの提出を求めた。これにより，動画内容への理解を深めるだけでなく，各教員が自身の教育実践と関連付けながら考察する機会を提供し，教育改善や教育向上への意識醸成を図ることができた。 また，研修会を通じて，大学院教育における分野横断型教育の必要性や，学生の主体的学修を促進する教育手法について教員間で共有する機会となり，教育内容や指導方法を見直す契機となった。さらに，新任教員研修では，本学の教育方針や授業運営上の留意点について理解を深める機会を設け，円滑な教育活動の実施につなげた。 今後も，教育環境や社会的要請の変化に対応しながら，教員相互の連携を図り，継続的なFD活動を通じて教育の質保証と改善に努めていく。	

1-5 教学マネジメントセンターの活動

教学マネジメントセンターの諸活動を始めるにあたり、『教学マネジメント指針』（中央教育審議会大学分科会 2020）に示された「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに応じた教学マネジメントの枠組を図表 2、3 のとおり体系づけながら、各レベルに応じた FD・SD、教学 IR の環境整備と具体的取組を進めている。



図表 2 教学マネジメントセンターが支援する教学マネジメントの枠組の概要図

項 目 レベル	教育・学修目標	改善充実のための機会 (FD・SD)	アセスメントツール (教学IR)
大学全体レベル (マクロ)	金沢大学 <グローバル>スタンダード (KUGS)	全学FD 新任教員説明会	学生生活実態調査 卒業・修了後アンケート
学位プログラムレベル (ミドル)	(各学類、専攻で定めた) ディプロマ・ポリシー (DP)	全学FD 学域・学類、研究科FD	卒業・修了者アンケート DP達成度自己評価
授業科目レベル (ミクロ)	(シラバスに明記された) 学修目標	全学FD 学域・学類、研究科FD 新任教員説明会 CLA研修	授業評価アンケート 成績評価分布

図表 3 アセスメントプランの枠組の概要図

1-5-2 FD・SD 活動の枠組と実績

令和3年度の教学マネジメントセンター設置以降、教育担当理事及び学長補佐（教育改革・学修支援担当）の指示のもと、全学的視点に立ったFD・SD活動を行いながら、部局FDとの協働・連携・支援を行っていく必要があるため、「全学FD・SD」と「部局FD」の関係性について事項整理しながら、「全学FD・SD」で担うべきこと、「部局FD」で担うべきことを明確化している。

【「全学FD・SD」の役割と基本メニュー】

①「全学FD・SD」の役割

- ◆大学の理念や基本方針の理解と共有
- ◆教職員として知っておくべき事項、遵守すべき事項の理解と共有
- ◆各年度における教学関連の全学的課題の理解と共有
- ◆教職協働、教職学協働のための場づくり

②「全学FD・SD」の年間メニュー（基本セット）

図表4 全学FD・SDの年間メニュー（基本セット）

時期	内容
4月	新任教員説明会
4月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）研修会，高度TA研修会
9月	全学FD研修会
10月	FD活動報告書成果発表会
12月	教学マネジメントセミナー（全学FD・SD）
2月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）実施報告会
2月または3月	教員向け英語研修会
3月	全学FD研修会（当該年度成果報告会）

【「部局FD」の役割と基本メニュー】

①「部局FD」の役割

- ◆各部局における主要事項の理解と共有
- ◆各部局における各年度での諸課題の理解と共有
- ◆各部局における授業・カリキュラム，学修状況・成果の把握・検証
- ◆各部局における全学的課題の理解と共有

②「部局FD」の基本メニュー

各部局に応じた組織単位での実施を尊重しつつ、部局主催でのFD活動について、以下の二つの区分に整理した。

ア) 個別テーマ型FD・・・部局における主要事項の理解と共有，部局における各年度での諸課題の理解と共有を目的として，当該部局が独自のテーマ設定により実施するFD

イ) 統一テーマ型FD・・・全学的課題の理解と共有などを目的とし，教学マネジメント

1-5 教学マネジメントセンターの活動

センター等が連携・支援しながら実施する FD

(授業評価アンケートや卒業・修了者アンケート等の結果報告、
機関別認証評価で求められる学位プログラム単位の DP・CP、
カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーに関する点検・
見直しなど)

令和7年度全体の FD・SD 実績は図表5のとおりである。FD 委員会及び教学マネジメントセンターが企画実施する定例的な全学 FD 研修会に加え、高大接続コア・センターと共同主催した「探究・STEAM フェスタ」についても令和6年度に続き企画実施し、高校生・高校教員と大学生・大学院学生・大学教員が集う対話の場づくりを設けることができた。

また、教学マネジメントセンターでは、時機に応じたテーマを話題に、短い時間で気軽に参加・意見交換できることをコンセプトとした新たな FD・SD イベントとして令和6年度から実施している「FD・SD ラウンジ」を2回企画開催し、いずれも好評であった。この企画は、近年、高等教育を取り巻く環境の変化は目まぐるしく、高等教育機関としてカバーしなければならないテーマや領域が多様化し広がっていることから、新しく対応すべきテーマを中心に、最新の情報や今後の方向性を情報収集・意見交換することを狙いとしたものである。

本学では、各種セミナー・シンポジウム等を学外に広く公開するとともに、録画データ及び配布資料を学内ポータルサイトにて公開・配信している。

図表5 令和7年度 FD・SD 実績の概要

内 容	開催月日	参加者数
新任教員説明会（令和7年度第1回全学FD研修会）	4月4日（金）午前の部 4月4日（金）午後の部	59名 135名
令和7年度第2回全学FD研修会 「大学院における分野横断型教育の意義と価値 ～ラボローテーションを中心に考える～」	7月16日（水）	58名
令和7年度第3回全学FD研修会 「学士課程の共通教育に求められるコンセプトと設計 ～金沢大学共通教育改革を中心に～」	10月21日（火）	130名 (学外公開)
令和7年度第4回全学FD研修会 「FD活動報告書成果発表会」	12月5日（金）	41名
高大接続ラウンドテーブル特別企画 「探究・STEAMフェスタ2025 ～高校生の探究心に火を灯す～」	12月14日（日）	86名 (学外公開)
令和7年度第1回FD・SDラウンジ 「エクセルと生成AIを活用したデータ集計・可視化の方法を学ぶ ～DX・IR基礎講座（第2弾）～」	12月23日（火）	54名 (学外公開)
令和7年度第2回FD・SDラウンジ 今改めて、学修ポートフォリオの機能や効果について考えてみよう」	2月17日（火）	101名 (学外公開)
教学マネジメントセミナー2026 「多文化共修を通じた学修成果を考える ～効果的な授業設計と運営方法を参考に～」	3月26日（木）	74名 (学外公開)

1-5-3 学士課程・大学院課程の質保証に関連する環境整備

教学マネジメントセンターでは、令和3年度の創設以降、令和4年度に3つのポリシーの一貫性のある見直し、令和5年度にカリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的再整備を行いつつ、授業評価アンケート等の学修成果把握のための教学IR環境の整備を進め、その総決算として、「教育の内部質保証に関する指針」を令和5年度末に策定するまでに至った。

令和5年度までに、学位プログラムレベル、授業科目レベルを中心とした教学マネジメントに関する基本的な環境整備が完了したため、令和7年度においては、学士課程<グローバル>スタンダードの改訂、3つのポリシーに関するモニタリングを目的としたFD活動報告書の様式の一部改訂を行った。令和8年度以降は、学士課程・大学院課程に関する一連の教育改革に寄与できるような組織基盤を整えた。

1-5-3-1 学士課程<グローバル>スタンダードの改訂

未来創成教育環 GS 教育企画部「学士・大学院一貫教養教育ワーキング・グループ」における教学マネジメントセンターからの「学士課程<グローバル>スタンダード」改訂提案を踏まえながら協議を重ね、令和7年6月の教育研究評議会において承認された。

学士課程<グローバル>スタンダードについては、平成28年の制定以来、令和3年に6群を加える改正を行ったが、全面的な見直しを行っていないため、令和6年に大学院課程<グローバル>スタンダードを改正したことを踏まえ、社会の情勢や要請を反映して従前の6群から4群からなる構成とした。具体的な改訂内容は以下のとおりである。

図表6 学士課程<グローバル>スタンダード改正前・改正後

(現行)			
1. 自己の立ち位置を知る 鋭い倫理感と科学的知見をもって、人類の歴史的時間と地政学的空間の中に立つ自己の位置、自己の使命を主体的に把握する能力	2. 自己を知り、自己を鍛える 自己を知り、その限界に挑戦し、知的冒険と心身の鍛錬を通して常に自己の人間力を磨き高めていく能力	3. 考え・価値観を表現する 論理的構成力や言語表現力を駆使して概念やアイデアを明確に表現し、かつ自己の感性や価値観を的確に他者に伝える能力	
4. 世界とつながる 他者への深い共感に基づいて異文化と共生し、各人にとっての自国と郷土の文化への自覚と誇りをもって、世界と積極的につながっていく能力	5. 未来の課題に取り組む 科学技術の動向、自然環境変動、持続可能性などの多角的視座から地球と人類、国際社会と日本の未来を総合的に予測し、未来の課題に取り組んでいく能力	6. 新しい社会を生きる Society 5.0において、幅広い分野や考え方を俯瞰して異分野をつなげる力と新たな物事にチャレンジするマインドを備え、多様な他者との協働により未来の社会的課題を解決に導くための能力	
(改正案)			
1. 人とつながる・共生する 自国の文化や歴史を深く理解しつつ、積極的に世界とつながり、異文化を受け入れて多様な人々と協力しながら、個人および地域・国際社会の健康と発展に貢献する能力を身につける 《キーワード》 多文化共修 国際・地域協力 歴史理解 ウェルビーイング	2. 自己を探究する・超越する 自己を知り、自己の可能性に挑戦することで心身の豊かな成長を目指す。豊富な論理力と表現力を駆使して他者と共感的に関わり、互いの感性、価値観、アイデアを表現し、伝え合う能力を身につける 《キーワード》 自他エンゲージメントと共感 考え・価値観の表現 心身の成長 コミュニケーション	3. 今を知る・未来を考える 科学技術の動向、自然環境変動、持続可能性などの多角的視座から、地球と人類、国際社会と日本の未来を総合的に予測し、未来の課題に取り組んでいく能力を身につける 《キーワード》 現代社会の課題 持続可能性の探究 生物と環境 未来予測	4. 新たな価値を創造する STEAM教育を基盤とし、データの確かな理解と思考の論理的構成を通して社会の課題を俯瞰し、豊富な想像力と果敢に挑戦するマインドを持って新たな価値を創造していくための能力を身につける 《キーワード》 STEAM AI・データリテラシー 俯瞰力 論理的構成力

1-5 教学マネジメントセンターの活動



図表7 学士課程<グローバル>スタンダードと共通教育科目 GS 科目の関係図

1-5-3-2 FD 活動報告書の様式の一部改訂

令和7年度FD活動報告書の作成に当たり、各部局向けの記入様式において、図表8のとおり、「3つのポリシーの運用状況」という照会事項を新たに加え、①3つのポリシーの記載内容の確認、②DP（Diploma Policy）に掲げた学修目標の達成度の把握の状況を毎年度確認することとした。このことにより、3つのポリシーに関するモニタリングを行うことができるように措置した。

図表8 令和7年度FD活動報告書作成様式（一部抜粋）

○照会事項1 3つのポリシーの運用状況

下記について、令和7年度の実施状況を選択してください。なお、一部のコース等で実施した場合は、実施したコース等を（ ）書きで記載してください。

観 点	以下のチェック項目について、該当するものに☑してください。
①3つのポリシーの記載内容の確認	☐ 3つのポリシーの記載内容について、学生に周知した。 ☐ 3つのポリシーの記載内容について、確認した。 ☐ その他（ ）
②DP(Diploma Policy)に掲げた学修目標の達成度の把握	☐ DPに掲げた学修目標の達成度について把握を行った。 ☐ DPに掲げた学修目標の達成度について分析を行った。 ☐ DPに掲げた学修目標の達成度の分析結果を共有した。 ☐ DPに掲げた学修目標の達成度の分析結果を改善に活用した。 ☐ その他（ ）

1-5 教学マネジメントセンターの活動

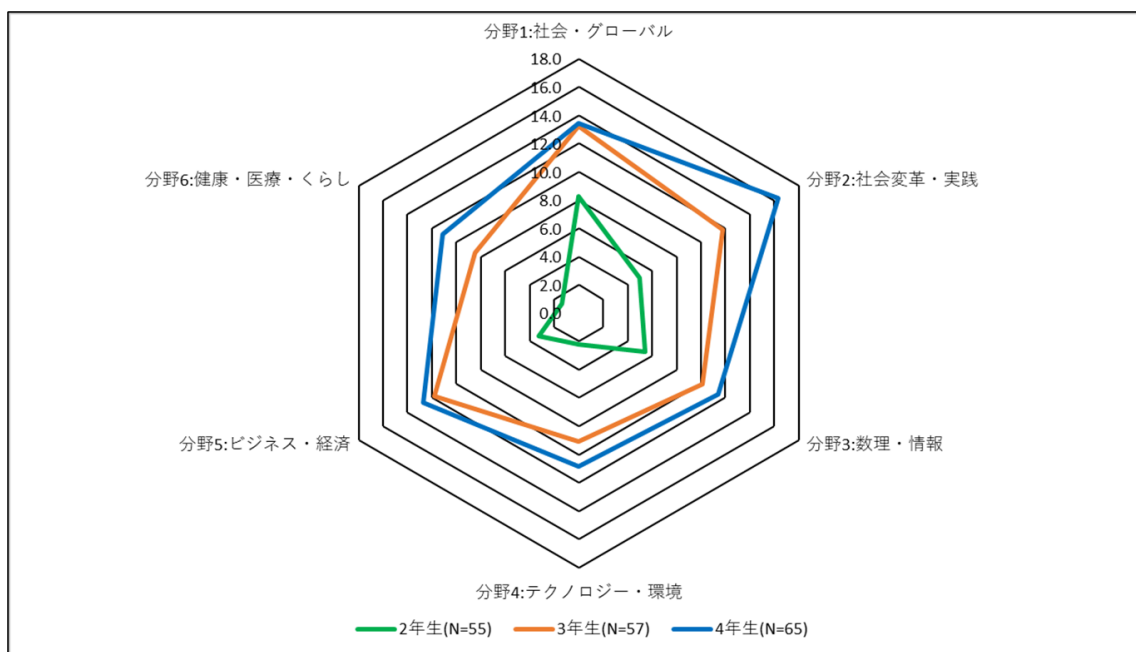
1-5-4 「学びの計画書」を通した DP 達成度可視化の整備

令和5年度から融合学域「学びの計画書」の新システム運用が進み、DP（ディプロマ・ポリシー）達成度可視化のほか、履修分野別の修得状況など一覧にて可視化するダッシュボード環境、さらには、就職活動等において、学生が自分自身の学修成果を説明するエビデンスとして活用する環境が整った。図表10のように、カリキュラム検証にも活用している。

今後は、融合学域での「学びの計画書」の運用実績を踏まえながら、全学での学修ポートフォリオの改善充実に活かしていくこととしている。



図表9 システム整備した「学びの計画書」に関するイメージ画面



図表10 融合学域先導学類生（2年次～4年次）の履修分野別の修得単位数平均の推移（令和6年度Q3時点）（「学びの計画書」を活用したカリキュラム検証の一例）